

総
州
家
御
譜
雑
録

(表紙)

三番箱

伊進上

總州家御譜雜録 全

(中表紙)

(嘉永三年)
庚戌五月稿終

総州家御譜雜録

○師久

幼名生駒丸 上総三郎左エ門尉 大夫判官 従五

位下 上総介 稱総州家、○正中二年乙丑八月十

六日誕生、母者大友因幡守親時入道道徳女○貞和

三年九月廿八日、應尊氏郷之命、馳加山名伊豆守

時氏之南方之陣云々、○文和元年辰十月六日、拜

領肥前国松浦荘之内早湊村、○三年午六月、自十

日至十二日攻落尾崎城、在高城郡出水、知色彦三郎入
道行覺所捕籠也、亦名知色城、

據之、○翌年九月二日、官方大将三条待從困攻櫛

木野城、故為後攻五ヶ日相戦得勝利敵退去云々、

○十月廿二日、凶徒又知色城馳向之一日一夜合戦、

被疵云々、○道鑑分讓薩隅兩國、師久氏久兄弟故、

師久補薩摩國守護職貞治二年、居住薩广郡碓山城、

○永和二年丙辰三月廿一日卒、五十二歳、法名号

定山道貞大禪定門稱名寺殿、

○伊久

初忠光 彌三郎 太夫判官 上総介 九花齋○貞

和三年丁亥二月朔日生、○嫡子守久不孝無道、而

非可續家器、故代々家督相傳之重器讓從弟陸奥守

元久、自是奥州家日盛、総州家日衰月微也、○應永十四年亥四月六日卒、六十一歳、法名久哲道親大禪定門

久安

号碓山、三郎左衛門尉 金吾○二代忠安改碓山號始良、五代兵部少輔祐久ニ至テ又号碓山、八代忠親ニ至テ又号始良、而后至于十二代次右エ門久包、寛文十一年四月朔日、奉 綱貴公命又歸碓山、是兼日依奉願也、十三代仲左エ門久興時有命、嫡子久字ヲ許、二男以下安之字ヲ可用云々、○永和四年戊午九月、肥後國託間ヶ原ニ戦死、

忠安

光久

治久

始良三郎左エ門尉 三郎左エ門尉 兵部少輔

祐久

久廉

久次

兵部少輔 又号碓山、左衛門尉 又九郎

忠親

彌九郎或作小二郎 又号始良、

戰死於隅州生別府、天文十年辛丑十二月、豊州忠廣・北郷忠相等合兵討榊山安藝守善久、蓋此時乎、

久近

久次

次郎左エ門尉

新次郎天正十三年酉閏八月十三日、戰死堅志田、十六歳、

忠種

忠包

初久寛 久包
乙千代 十郎兵衛

三郎兵衛

實木脇(揚力)

新次郎男也、

寛永九年申二月十七日生、
母仁礼藏人頼尊女、復号碓山、

次右エ門 入道道鉄 實喜

入久右エ門久守男、御納戸

奉行 御近習役

久興

久(規カ)

久(マ)

久(マ)

嫡者久字、二男安字ニナル、

次右エ門

次右エ門

實石原十

八郎右工門 為御馬廻、兵衛嫡子也、
為御船奉行、

○守久

生若丸 太夫判官 播磨守 入道号得佛、法名義
山道仁○應永廿九年、太守久豊公使嫡子又三郎貴
久、攻守久居城山門院、失防禦而出奔肥州、不幾
年卒、

忠朝

号相馬、山城守 始忠
明、入道々聖○隈城落 子嗣 出家
去之後、鹿尾烏和泉崎
[娶二階堂山城守行貞女為室]
居住、

忠氏

忠成

久照

女子二人

生黒丸 又三郎 稱北殿、○初元久公御養子、後
違變、○本田親忠有挾恨於太守、而以久照為大將
櫛間院ヲ発向、志布志合戦ス、○法名道音

○久世

兵衛尉 三郎左工門尉 上総介○嘉慶元年生、○
應永廿四年正月十三日、為太守久豊公自害于鹿尾
島千手堂、年三十一歳、法名惟馨久徳大禪定門
殉死本田伊賀守・小田原彈正・天辰・黒田・伊駒・
金田・侍中太郎、其外殿原拾一人、

○久林

大太郎 [左工門尉歟]
左兵衛尉○應永廿年巳生、母伊作大隅守

久義女○父久世誅爵後手勢悉退散、故川辺城出奔、
肥前高木其後到日州真幸院、○永享二年庚戌十一
月朔日、為太守忠国公被誅於徳滿城、年十八歳、
法名大義道椿 家臣本田石見・小田原空追跡殉死、
嗚呼是天哉命哉、師久子孫枝葉至于茲靡有了遺矣、
〔本系圖ノ人名上ノ「○」印並ニ原線ハ朱書ナリ〕

〔別紙〕

忠朝

初忠明 彦二郎 山城守 上總介 入道名道世
應安二年己酉八月三日生、

申木野頂峯院文書

敬白
奉寄進冠嶽云々、

全
敬白
冠嶽山三所云々、

全
冠嶽權現云々、

田布施前田弥左衛門所持文書

宮子若狹守

久種

應永廿八年十一月十五日

忠朝 (花押)

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」一〇〇九号文書ト同一文書ナルベシ)

相馬氏系図曰、應永十五年戊子正月三日、於川内平佐安之城
自害、年四十、以軍記考之、則不然、未知是
否乎
法號梅巖道眞 諡號慈雪院、

久照

又五郎 治部少輔 號北、法名道言

忠氏

鹽房丸 彦二郎 三郎兵衛尉
〔了左衛門尉〕

明德二年辛未、於大始良八幡城誕生、佗腹、文安二
年乙丑九月一日、於肥之後州山鹿莊死、年五十五、

法号心翁了性 諡號瑞龍寺、

干扇
〔了眞翁〕

出家 母前、

女子

上総禪尼 林香庵住持
〔了幸〕

女子

禪尼 伊集院圓通庵第三代住持

忠長

三郎左衛門尉 上総介 母二階堂某女

初薙髮名繁藏主、伊十院廣濟寺之為住持、後還俗如
斯也、

薩摩國之内田布施之事、
〔ママ〕

右、任先例、可致沙汰之状如件、

康正三年卯月廿六日

二階堂殿

忠長（花押）

〔本文書ハ「旧記雜錄前編」二一三六三号文書ト同一文書ナルベシ〕

3 〔聖業日記〕

○道鑑より嫡子師久三郎左衛門尉讓渡薩广國守護・十二

島ノ地頭職・薩广郡地頭職、

〔院脱カ〕

山門 市来院 鹿兒嶋郡 讃岐國榎無保上村 下総國

〔相〕 左右馬跡〔郡小河村〕 日向國高知尾庄 豊前國曾井田 豊

同本戸

後國井田郡

4 〔全〕

○二男氏久之分讓渡大隅國、雖然大隅ニ入部ノ事ハ鹿兒

島ニ無代テハ如何ト而、師久より御志ニ依テ鹿兒島ノ

郡司屋紙〔矢上〕を退治候テ氏久へ渡、谷山ノ郡司對道鑑波平

と云所江陣取、郡司分限之物ニテ陣にかゝり合戦ス、

5 〔全〕

○貞久嫡子宗久、十八ニテ判官渡家之嗜弓矢兵具ニ至迄

此時ニ取合候、秘事共ハ非被申候、其比長々在京ト云、

分國も遙事なれハ、万ニ付不覚候処、去ル子細候テ赤

松方御用ニ依被立、判官渡被逐候、京中之大小名何も

志合力有、其後ハ舍弟師久、其子伊久迄ハ判官殿と申、

末は滅亡候、左様之いわれに候や、元久惣翁より以来

判官司ハうハさなし、惣別當家之源は嶋津判官忠久と

申傳、以後嫡々ハ何も判官司可被用候得共、近代佳例

謂ニ依てなり云々、

6 〔聖業日記〕

○其比ハ薩摩碓山之城を取構、師久御住所ニ成而、隈之

城・串木野・荒川・羽島・高江・宮里・山門ニ取つ、

き渋谷ニ對合戦有、動すれば守護方を背くたり大将ニ

付、嶋津殿へ弓矢を取、爰ニ信濃源氏ニ楡井頼長・島

山礼部・肝付八郎兼重、此三人ハ三ヶ國を争ことくニ

地頭御家人思付ニ成而弓箭を取、坂より上ニテハ頼長・

兼重と合戦有ハ、禮部ハ島津方ニかゝり合戦有り云々、

7 見于南山巡狩録追加

嶋津判官殿 〔師久公也〕

○南方凶徒對治事、所差遣山名伊豆前司時氏也、早可發

〔本文書ハ「旧記雜録前編二」二四四六号文書ト同一文書ナルベシ〕

向之狀如件、

貞和三年九月廿八日

〔尊氏カ〕
御判
〔足利直義〕

嶋津三郎左衛門尉殿

〔本文書ハ「旧記雜録前編二」二二六四号文書ト同一文書ナルベシ〕

10 在官庫 奉行齋藤々内左之門尉

○大隅薩摩兩國凶徒退治事、去六月廿七日注進狀披見早、

依老牒病氣、差遣師久・氏久於彼兩國云々、籌策之次

第、殊以所感恩之狀如件、

文和元年十月三日

〔尊氏〕
御判

8 藤野氏文書

○去年女房装束利足拾貫文内未進分式貫文事、為下部藤

五郎・伴兵四郎給物、可被致沙汰由候也、仍執達如件、

貞和五年四月十一日 時朝在判

○あいはら
栗原下総守△

嶋津大夫判官殿跡

〔本文書ハ「旧記雜録前編二」三三八二号文書ト同一文書ナルベシ〕

11 水引執印文書

○於薩摩國致忠節之由、嶋津判官所注申也、尤以神妙、

弥可抽戰功之狀如件、

文和二年三月十日

〔足利義隆〕
〔花押〕

新田宮執印左衛門大夫殿

〔本文書ハ「旧記雜録前編二」二四七四号文書ト同一文書ナルベシ〕

9 見于南山巡狩録追加

○父上総入道所勞減氣之程、相催分國地頭御家人并同

族、可誅伐直冬以下凶徒等之狀如件、

觀應三年九月十八日

〔義隆ナラン〕
御判

12 全

○薩摩國凶徒誅伐事、相〔不明〕嶋津判官師久、可被致忠節候、

〔其〕子細可令注進也、仍執達如件、

文和二年四月廿六日

〔色直氏〕左京權太夫〔花押〕

新田宮執印左衛門太夫殿

〔本文書ハ「旧記雜錄前編二」二四七七号文書ト同一文書ナルベシ〕

13 〔自濃州垂井宿為齋藤左工門討奉行被成下御教書案〕

○京都合戰難儀之間、一旦雖引退濃州、方々官軍馳加之

上、將軍家已御上洛、先陣勢參着之間、明日十日所責上也、其堺事、同心之輩相共可退治凶徒等、且帰洛之時、可差下討手之状如件、

文和二年七月九日

〔義詮〕御判

嶋津判官殿

〔本文書ハ「旧記雜錄前編二」二四八九号文書ト同一文書ナルベシ〕

14 〔戰于南山巡狩錄追加〕

○去月十四日注進状披見了、於國致忠節之条、尤以神妙也、既凶徒没落之間、昨日廿六日令人洛了、早相觸國人等、弥可抽戰功之状如件、

文和二年七月廿七日 〔義詮〕御判

嶋津判官殿

〔本文書ハ「旧記雜錄前編二」二四九一号文書ト同一文書ナルベシ〕

15 〔案文在官庫〕

○去〔年〕七月九日御教書謹拜見仕候早、抑御上洛之間、凶徒等先立没落之条、天下大慶目出度相存候、就夫御敵等〔少々〕降参仕〔候〕、其外凶徒等为退治、差向愚息師久・氏久并渋谷一族等相共候、合戰之次第追可令言上候、

以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

文和二年十月廿八日

〔島津貞久〕沙弥道鑒上

進上 御奉行所

〔本文書ハ「旧記雜錄前編二」二五〇二号文書ト同一文書ナルベシ〕

16 〔在官庫〕

○注進状披見早、忠節之至、尤以神妙、九州之凶徒討手之事、所有其沙汰也、致用意、弥可抽戰功之状如件、

文和三年二月十二日

〔尊氏〕御判

嶋津上総三郎左衛門尉殿

〔本文書ハ「旧記雜錄前編」二二五二七号文書ト同一文書ナルベシ〕

17 〔全〕

○今年二月十二日御教書五月廿五日到來、謹拜見仕候早、
任被仰下之旨、致用意、可抽戰功候、

一薩摩國和泉庄御敵等、擬可寄來于老父道鑿之居住山門
院木牟禮^①、城之由間候、間、舍兄師久押寄和泉庄知色

彦三郎入道行覺以下凶徒等所楯籠尾崎城、去六月十日
迄于同十二日、致^②散々^③合戰、追籠彼城凶徒等、數輩

討捕候之処ニ、重所之御敵等馳寄、致合戰最中候、
一畠山修理亮直頭為後攻、相催日向大隅兩國凶徒等、寄

來之由承候之間、氏久馳向要害相待候、合戰始候者、
追可令注進言上候、凡云宮方、云佐殿御方、御敵等蜂

起之条、度々令注進候、急速可被經御沙汰候哉、以此
旨、可有御披露候、恐惶謹言、

文和三年六月廿日 左衛門尉氏久

進上 御奉行所

〔本文書ハ「旧記雜錄前編」二二五二七号文書ト同一文書ナルベシ〕

18 〔載于南山巡狩錄追加〕

○案文

就宅万城没落事、薩州凶徒等馳集市來院伊作田田城、
可寄來當所碓山城之由、相巧候之間、差向所之通路、
致合戰用意候之刻、畠山匠作以下逆徒等、當可打入日

向國真幸院并大隅國下大隅郡之由、其聞得候之間、當
國賊徒等依相待、直顯打立時分候坎、引掃面々城墻候

訖、隨而寄來真幸院候者、定孫三郎殿可有御發向候之
間、其時分者早々馳參可致合戰候、急打入下大隅郡候

者、可致後攻之間、可預御合力之由、令申彼御方候早、
如此凶徒等令蜂起候之間、難儀至極候、所詮渋谷一揆

并地頭御家人等、師久相共致合戰之忠節者、可有抽賞
之旨、被成下御教書候之者可宜候、仍御方之仁等交名

注文^{別紙}有之、令進覽、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、
文和三年六月廿日 左衛門少尉師久上

進上 御奉行所

〔本文書ハ「旧記雜錄前編」二二五二八号文書ト同一文書ナルベシ、尚「同」二二五二
四号文書ト同文、恐ラク月日誤レルモノナラン〕

19 (別紙)

「下 薦野太郎次郎宗泰

和泉庄久重名内水田參町蘭三ヶ所地頭職事

右、為賜分所宛行也、任先例、可知行之状如件、
文和三
八月一日

師久（花押）

〔薦野〕

〔本文書ハ「旧記雜錄前編二」二五四七号文書ト同一文書ナルベシ〕

20 〔載于南山巡狩録追加〕

○薩摩國凶徒和泉庄名主知色彦三郎入道行覚之城塙於追

落、入替御方軍勢、於彼城踏之候段、以去六月十三日、

令注進言上候訖、定令參着候哉、仍賊徒等寄来當所之

城之由、承及候之間、去月廿二日師久馳越、令在城候、

將又當庄合戦之時分、同國官方凶徒等以之外蜂起之間、

舍弟三郎左衛門尉夸、鹿兒島郡東福寺城向合彼御敵等、

致忠節候、且委細之旨、氏久令言上候訖、爰肥後國救

摩郡凶徒須惠・多良木仁同國凶徒菊池・内河以下致合

力、一色少輔孫三郎殿所被楯籠城塙寄来、合戦最中之

由申候之間、薩州凶徒蜂起雖難儀時分候、^{⑧先}差進軍勢

候訖、合戦之次第、定孫三郎殿可有注進候哉、以此旨、

可有御披露候、恐惶謹言、

文和三年九月十八日 左衛門尉師久上

進上 御奉行所

〔本文書ハ「旧記雜錄前編二」二五六三号文書ト同一文書ナルベシ〕

21 〔水引執印文書〕

○一色殿并大友刑部〔氏時〕太輔攻入肥後國、被始合戦早、何為

合力、所打立也、^{⑧大}来十五日以前、可被馳寄和泉城・同

〔本マ、〕
〔六カ〕院間、依執達如件、

文和四年三月三日

〔師久公〕
左衛門尉（花押）^{⑧少}

執印〔友總〕左衛門太夫殿

〔本文書ハ「旧記雜錄前編二」二五七八号文書ト同一文書ナルベシ〕

22 〔写在官庫、奉行佐々木四郎左エ門入道殿 文和四年卯月十四日言上〕

○嶋津上総入道之鑿代頼兼謹言上

欲早被優軍忠劣、愚息三郎左衛門尉氏久官途事、任

先度御沙汰、落居篇蒙御免、同孫子弥三郎忠光以下

一族等官途所望事、▽^{⑧面}△蒙芳免間事、

副進

一通 系圖

一通 氏久并一族等官途所望注文

右、氏久宮内太輔所望事、為二階堂大藏少輔御奉行、

捧御狀之間、去々年^①文和二月御披露之處、如御返答者、

御免之段雖不可有子細、為子細^②為舍兄師久六位判官之

上者、爭為舍弟氏久之身、^③省府可望申哉、道鑿可尋

下之由就被仰出、即捧請文之處、大藏少輔云々奉行上

表早、仍^④為攝津右近大夫將監御奉行、難令言上、去

年依濃州下向、于今被閣之条、不便之至也、就其雖為

非重代之仁、依戰功之勞、官途蒙御免之輩^⑤繁多也、

何況道鑿并一族等官途事、自右大將家以來、云廷尉、

云^⑥國司、相續于今無相違之處、氏久官途令延引之条、

失面目者也、所詮任先度御沙汰落居之篇、氏久宮内大

輔可蒙御免者哉、次孫子弥三郎忠光以下庶子等官途事、

注文別紙進覽之、彼仁等當時不退合戰之間、軍忠依異

于他、吹拳所令申也、急速任譜代之例并軍功之忠、面

々官途蒙恩免、向後弥為抽無二忠節、粗言上如件、

文和四年卯月 日

23 〔載于南山巡狩錄追加〕

○案文

去三月十二日御教書五月十九日到来、謹拜見仕候訖、

抑被追^⑦、東寺凶徒等悉退治之条、天下大慶此事情、仍

佐殿鎮西御下向候者、致用意可對治之由事、任被仰下

之旨、可令存知候、^⑧老父所勞之間、師久捧請文、以此

之旨、可有御披露候、恐惶謹言、

文和四年六月一日 左衛門少尉師久請文

〔本文書ハ「旧記雜錄前編二二五八四号文書ト同一文書ナルベシ」

24 〔全〕

○雖無何事、細々可令啓案内之由存候之處、遼遠之間、

乍存罷過候之条、背本意候、抑兵衛佐殿以下凶徒等、

京都乱入之由承候之間、即可馳參候之處、畠山修理亮

直顯以下凶徒等、引合當國凶徒等、可寄来老父道鑿城

之由其間候^⑨、相待時分候程ニ、無其儀候之處、佐

殿始申^⑩、東寺沒落之由、下給御教書候之条、先以目出

〔本文書ハ「旧記雜錄前編二二五八一号文書ト同一文書ナルベシ」

畏入候、仍為凶徒退治打立最中候、合戦之次第追可④令
言上候、在京之時者、細々被懸御目候之条、于今畏入
候、何様當國少靜謐候者、早々参上可仕候、諸事期後
信候、恐々謹言、

六月二日

左衛門少尉師久

謹上御宿所

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二二五八五号文書ト同一文書ナルベシ)

25 「写見于雜抄」

○薩摩國凶徒牛屎左近將監高光・市来新左衛門尉氏家・

東郷藏人道義、肥後國葦北庄宮方凶徒、引合于當國凶
賊和泉庄下司諸太郎兵衛尉政保以下、去四月廿六日夜
丑刻、老父居住忍入于山門院木牟禮城、及合戦次第、
舍兄師久注進之間、不及巨細候、次日州畠山匠作并伊

東一族於佐殿方打出候之間、土持薩摩守貞綱同一族等
参御方、可始合戦之由馳申候、彼書状進覽之、依令談
合球礮一色孫三郎殿、既打立候合戦之次第、追可④ナシ
注進言上候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

〔當正平十年〕乙未

文和四年六月十八日

左衛門尉氏久上

進上 御奉行所

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二二五八七号文書ト同一文書ナルベシ)

26 「載南山巡狩錄追加」

○老父道鑒所領薩摩國櫛木野城郷宮方大将三條侍従并市

来太郎④氏悉左衛門尉・鮫島彦次郎入道・知覽四郎④兼道・左當彦

次郎入道以下賊徒等、④去九月二日、當城寄来之間、師

久馳向、五ケ日致合戦、御敵等数輩討捕之追落訖、同

御方打死手負注文、先立令言上、随而一色殿注進令申

者也、次依九州宮方蜂起、大友式部④太太輔・宇都宮常陸

前司・千葉之二郎以下輩凶徒同心之由、其間候之上、

一色殿長州御越之段、就之承及、當國凶徒和泉庄名主

等并牛屎左近將監・在國司入道以下率多勢、去十月廿

二日、寄来師久城郷間馳向、一日一夜致合戦之刻、師

久三ヶ所被疵、④左ウテ右引合左足同伯父尾張守資忠被疵右腕早、

仍當國守護代酒勾兵衛四郎・同左衛門四郎・愛甲弥四

郎・土田五郎・阿曾谷三郎右衛門尉・堀源五打死畢、

其外手負百餘人有之、注文路次難儀之間、追可令進上

候、仍向御所之御間、御發向御延引候者、師久捨國可

令參洛候、將又老父道鑒中風之身難儀之上、合戰最中

之間、不能委細、若此条偽申候者、可罷蒙八幡大菩薩

御爵候、^①此旨可有御披露候、恐惶謹言、

文和四年十一月五日 左衛門少尉師久

進上 御奉行所

〔本文書ハ「旧記雜錄前編」二二六〇〇号文書ト同一文書ナルベシ〕

27 〔戰南山巡狩錄追加〕

○去月五日注進狀披見了、知色城合戰之時、被疵之由被

聞召、^②忠功異他之条、尤以神妙、凡鎮西事、嚴密沙汰

最中也、其間全要害、可相待左右、且地頭御家人已下

同心之輩等、就忠否注進、可有其沙汰、次討死跡輩等

事、所被下御感也、向後弥可廻籌策之状如件、

〔當正平十年〕
文和四年十二月廿八日 御判

嶋津判官殿

〔本文書ハ「旧記雜錄前編」二二六〇九号文書ト同一文書ナルベシ〕

28 〔写在史抄〕

○上卿 右衛門督

延文二年正月廿八日 宣旨

左衛門少尉藤原師久

宜叙從五位下、

藏人頭左中辨藤原時光奉

〔本文書ハ「旧記雜錄前編」二二二号文書ト同一文書ナルベシ〕

29 〔全〕

○上卿 右衛門督

延文二年正月廿八日 宣旨

從五位下藤原師久

宜如元為檢非違使、

藏人頭左中辨藤原時光奉

〔本文書ハ「旧記雜錄前編」二三号文書ト同一文書ナルベシ〕

30 〔藤野氏文書〕

○しまつのはんくはん〔ママ〕され候もんその事

右、もんそのちうもんをハ、弥阿弥陀仏御もとにまい

らせをき候、このもんそ御さたに入候間、貞阿申〔候と〕

ようすき候てハ、もとのことく進をき候へく候、よて

〔本ノマ、
①終候〕

後ために[○]如件、

延文二年九月四日

〔酒匂次郎左エ門貞資入道〕
沙弥貞阿在判

〔本文書ハ「旧記雜錄前編二」二二三号文書ト同一文書ナルベシ〕

31 〔牛屎文書〕

○為加治木發向打立候刻、渋谷一族等、以真顯合力之方

便、相語當所郡司・同一族、去月晦日辰刻、渋谷勢打

入彼等之城候之際、合戦最中候、仍御合力候者、悦存

候、委細之旨東郷令申候訖、定可被聞召候哉、[○]多事期

後信候、[▽]⑩恐々△謹言、

〔正平十二年酉〕
十月五日

師久御判

牛屎左近将監殿

〔高元〕
〔薩州牛屎院牛山城主也〕

〔本文書ハ「旧記雜錄前編二」二二五の2号文書ト同一文書ナルベシ〕

32 〔正文在官庫〕

○ 條々

一祖父道佛并亡父道儀代々任置文之旨、無主一族同子孫

等跡事、惣領師久可申給之、

〔本文書ハ「旧記雜錄前編二」二二五号文書ト同一文書ナルベシ〕

延文三年卯月五日

道鑒（花押）

一惣領大事出来之時者、庶子等悉可令同道、若令違背者、

可申給彼仁跡、

一 道鑒男女子孫得分親等中仁、於現不忠不調輩所領者、

師久可知行之、[○]租為掠取所帶、[○]權於不実者、不可知行

道鑒跡、

一 男女子孫等、無罕籠儀之様可加扶持、

一 乙壽丸讓与所領等事、若無一子、有早世事者、師久可

知行之、

一本田次郎左衛門入道兼阿事、為年来仁上、自幼少至于

今、都鄙令随逐之間、存不便者也、兼阿一期之程、恩

給地等不可有改動之儀、

一 讓状拾通所認置也、

右條々、守堅此置文[○]之旨、可致其沙汰也、於違犯子孫

等者、不可知行所領之状如件、

33 〔藤野氏文書〕

▽ ⑩進上 御奉行所△

○嶋津上総入道之鑿謹言上

欲早被除畠山礼部(直題)・太宰筑後守頼尚今者出家・大友刑部

大輔氏(時)拜任國々關所并寺社本所領、於道鑿分國、

被經用捨(御沙汰)條、失面目上者、且任先例、且依抽無

二軍忠實不可有(マ)由、預御教書、次本領讚岐國櫛

無保、中國大將細(河典鹿)、近年押領段被停止全知行、

弥成軍忠勇間事、(細川頼之)

副進

一通 右大將家御下文文治三年九月九日、教通雖有之、依繁略也、

二通 鎮西警固御教書案弘安九年十二月卅一日、正應六年三月廿一日

一通 讚岐國櫛無保御下文貞應二年九月七日

右々大將家御代文治三年九月九日、先祖豊後守忠久日

向・大隅・薩摩三ヶ國令拜領、其後建久年中、太宰筑

後守頼尚之曩祖武藤小次郎資頼筑前・肥前・豊前三ヶ

國被宛行、大友刑部大輔氏時先祖豊前之司能直豊後・

肥後・筑後三ヶ國同年給之、如此自被宛行九州於三人

以来、守護職面之管領無相違之處、中比遷代(先)一族鎮西

管領下向之刻、各二ヶ國津之被借召之時母、三人用捨

之儀無之、就中日向・大隅・薩摩三ヶ國者、為嶋津庄

内國之條、御下文明鏡之間、名字之庄内國之也、次

一統時分、(少式貞經)大宰筑後入道妙惠・大友近江入道(貞季)并道

鑿面之、一ヶ國津之被返付時母、以同前之處、於當御

代争及用捨御沙汰、可失面目哉、爰頼尚雖罷成御敵、

依參御方、本領新恩悉令安堵、結句被任國訖、次畠山

礼部、是又去觀應三年以来、迄于文和四年、就于被成

御敵、可誅伐之由、度々雖被成御教書、延文元年以来、

為御方之旨依被申、數ヶ所恩賞并日向國守護職被任訖、

而道鑿自最初、父子共於御方致忠節、今者及八旬之間、

仰付愚息師久・氏久兩國事、抽不断合戰大功之處、於

畠山礼部・頼尚・氏時等分國者、無相違被任之、至于

道鑿守護職關所以下、被經用捨御沙汰之條、余命不幾、

及老後失面目之段、歎中愁訴也、凡以有忠輩被任國者、

古今傍例、不可勝計、何況道鑿、云先例、云當御代忠、

尤可有忠賞者哉、次讚岐國櫛無保地頭職者、曾祖父左

衛門少尉藤原忠義、去貞應三年九月七日、為勲功之賞

令拜領、知行無相違之處、近年中國大將細河(先)既典押領

之條、(藤原九)歎勸次第也、如載先段、道鑿於御方數十ヶ度之

軍功拔群之間、可預恩賞之由、令言上之者、争於本領

可有違乱哉、就中九州合戦最中、抽軍忠時分也、然則
彼両条、嚴密被經御沙汰、預御教書、弥為致忠節、言
上如件、

康安二年六月 日

(本文書ハ「旧記雜録前編二」一〇三号文書ト同一文書ナルベシ)

34 「冠嶽文書」

○補仁(在)

薩摩郡内先達職事

右、於彼職者、良行所冠嶽榮永也、早任先例、可令補
任状如件、

康安貳年八月廿五日

師久御在判

(本文書ハ「旧記雜録前編二」一〇八号文書ト同一文書ナルベシ)

35 「藤野氏文書」

○去三月三日、薩州宮里城合戦之時、抽軍忠之旨、嶋
津(大)太夫判官所注進也、尤以神妙、弥廻籌策、可致戦功
之状如件、

貞治元年十月十七日

若松孫太郎殿

「義詮」
御判

(本文書ハ「旧記雜録前編二」一一三号文書ト同一文書ナルベシ)

36 「全」

○去三月三日、薩州宮里城合戦之時、抽軍忠之由、嶋津
太夫判官所注進也、尤以神妙、弥廻籌策、可致戦功之
状如件、

貞治元年十月十七日

薩摩郡司弥太郎殿

(足利義詮)
御判

(本文書ハ「旧記雜録前編二」一一四号文書ト同一文書ナルベシ)

37 「正本在官庫欵」

○讓与

「正文在官庫カ」

氏久分

○大隅國守護職付守護領

薩摩國指宿郡

肥前國倉上庄

筑前國今津村

同國本庄内多祢嶋

岩河村南 但於南方者、女子祖鑿房
一期之後可知行

同國寄郡内

大祢寢院 深河院 鹿野院

下大隅院○郡 申良院 筒羽野村

曾小河村

薩摩國鹿兒島郡地頭職但除永吉村、

日向國高知尾庄

右所々者、限永代所讓与也、有限於御公事者、守惣領

師久支配、任先例、可令勤仕之状如件、○勉

〔南朝正平十八年癸卯〕
貞治二年卯月十日

〔右接目裏判〕
〔師久〕(花押) 〔氏久〕(花押)

〔本文書ハ「旧記雜錄前編二」二一九号文書ト同一文書ナルベシ〕

38 〔戴氏久公御舍弟但馬守氏忠譜〕

○讓与 乙壽丸分

薩摩國鹿兒島郡内永吉村

大隅國寄郡内百引村

筑前國三奈木村地頭職

右所々者、限永代所讓与也、於有限御公事者、守惣領

師久支配、任先例、可令勤仕之状如件、〔勤之〕

貞治二年卯月十日
〔癸〕
〔右接目裏判〕
道鑿

〔師久〕(花押) 〔氏久〕(花押)

〔本文書ハ「旧記雜錄前編二」一三〇号文書ト同一文書ナルベシ〕

39 〔正文〕

○讓与

薩摩國鹿兒島郡内中村・郡本兩村郡司職事

右所者、一期之後者、氏久可知行状如件、

貞治式年卯月十日
〔右接目裏判〕
道鑿

〔師久〕(花押) 〔氏久〕(花押)

〔本文書ハ「旧記雜錄前編二」一三一号文書ト同一文書ナルベシ〕

40 〔正文〕

〔本文書ハ三七号文書ト同文ニツキ省略ス〕

41 〔藤野氏文書〕

○大隅國本庄内岩河村南方御讓状一通、儲給候早、仍請

取之狀如件、

貞治二年卯月〔廿五〕日

祖鑒在判

〔本文書ハ「旧記雜錄前編二」一三五号文書ト同一文書ナルベシ〕

42 〔上〕

○薩摩國鹿兒島郡内中村・郡本両村御讓狀、隨給候早、

仍請取狀如件、

貞治二年卯月廿五日

あねゝ在判

〔本文書ハ「旧記雜錄前編二」一三六号文書ト同一文書ナルベシ〕

43 〔藤野氏文書〕

○寄進

諏方大明神御寶前、山門院西方袴田〔袴〕之内水田參段事、

右、所奉寄進如件、

應安元年十月十五日

〔師久公御法号也〕
沙弥道貞

〔本文書ハ「旧記雜錄前編二」一九六号文書ト同一文書ナルベシ〕

44 〔聖榮日記〕

○師久訴陳申狀

豊後合戰并薩劬同乱事、度々注進言上仕候處、依路次〔之處〕

往覆難成、無令參着候条、恐歎不少〔不〕候、〔是ヨリ一抑云々〕

州御合力、去々年九月廿六日、懸令發向候処、於中途〔トアリ〕戰〔戰〕、〔應鹿肥後路〕

當國〔之〕凶徒和泉諸太郎兵衛尉政保、同一揆牛屎〔族〕近監〔左近〕

將監〔下司〕、〔族〕高元・同一揆隅州馬越藤四郎行家・同一揆肥州葦北〔族〕

七浦賊徒等依差塞通路候、對彼輩致合戰候處、及親

類若黨并渋谷一族數十人討死手負候云々、其間子細

管領御方言上仕候早、定御注進候哉、雖然重而可令発

向候处、地頭御家人等更ニ催促國〔之〕凶徒〔等已餘〕已餘〔候之處〕テ過半〔候〕

蜂起候間、難閑候上、對政保并一揆打城〔族等云々〕彼合戰以

後、自去々年于今在陣防戰〔具〕之間、御合力〔具〕之事不遂

其節之条、且ハ可有御高察候哉、且ハ分國難儀之段、

管領之御使長刑部尉見知、次舍弟氏久於隅州、自去々

年迄于今向合敵陣致合戰候、巨細〔少輔〕之段定而注進〔候畢〕

仕候哉、次豊州合戰之事、大内介弘世就渡海、菊地肥〔池〕

後守武〔光〕元退散候間、御方大慶此境候处、無幾程弘世依

帰國、鎮西及難儀候、管領〔已〕周防國府御開之間、

則進飛脚候早、随〔証〕てハ御上洛之由預御返事候驚存候、

〔証〕

急速九州對治被^レ經^ル御沙汰被差討^レ早^ク、所仰候、次雖無^レ

勢候、兄弟相共踏兩國、連日致合戰候条、被下篇直御^ニ

使、預御候知候者可然存候^ニ、次分國軍勢等可應師久催促旨^ニ、

被成下御教書、廻凶徒^ノ廻^ル對籌策候、以^テ此旨可有披

露候、恐惶謹言、

貞治二年五月二日

左衛門尉師久判

「探題」判官殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」一三七号文書ト同一文書ナルベシ)

貞治五年八月廿三日 師久公御判書ニテ、二階堂隱岐

守直行に阿多郡内觀音寺・同所白河村可知行之御状被

下之、

45 「藤野氏文書」

○御札委細承候早、如仰去春之比、預御状候、恐悅候、

随而御賢息可有御參之由承候之際、目出候之處、御延

引^ル、無念之次第候、其間事御使令申候了、恐^ニ謹言、

「永和元年九」
七月四日

(菊池)
肥後守武光判

謹上嶋津判官入道殿^{「師久公ナラン」}
御返事

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」一六〇号文書ト同一文書ナルベシ)

46 「聖榮自記」

○氏久ノ御代ノ内ニも是程之大合戦ハなし、敵も味方も

在^ル所^々引返、暫年月經処、又四ヶ所より軍起而嶋津

上総介師久ニ弓矢を取懸る、其比薩摩郡ニ高江之手城

を取構御持候処を、清色重門大将として押寄攻る、城

衆もくきやうの人となれば、ふせき戦けれハ仕損退候

処、重門堀ニはまり、岸ニ付而つめ上り、甲のはちを

打わられて堀之底ニ而被討早、是ニ仍山北大勢なれば、

入替^レ攻上ル、城内も不残手負ニ成而攻被落早、城

衆ニ式部三郎太郎・守護代酒勾・石塚一類・不笠・中

條を始として、宗徒之人^々上下数十人被討、然間碓山

物よわくなり、山北両院・求广・四ヶ所同意して碓山

之城を取巻、氏久ハ其比坂之上ニ御座有、此事を聞召

急ニ御渡海有て、先伊作・伊集院寄^レ勢を以薩广山を

馳越、一陣を取、跡勢を待候処、市来心替して薩广山

47 見于本田重親譜中

を切ふさくニ依通路切、更ニ方便ニ不及、其時城よりもひそかに御音信有り、此刻ニ成而ハ一家滅亡ニ可及、城をも開、所領なども望ニ依るへしと仰有、此旨を市来ニ依被仰出、御返事ニ何之望もなし、御縁中ニ被召加は、道をも明、御用ニも可立と被申、是を氏久聞召、當座命おしきと而家ニ疵を付事、以後迄も口惜と而被仰切、其時一家御内談合有り、女子ハ必他人之家をこそ上中ニよらすふさけ、師久ニ城をもあけさせ申而ハ可為家之疵と而、一味同心ニそろひ、市来ニ領掌有り、如被申道を通、路輒なれば、跡勢伊集院ニひかへたるか、不移時山を越、陣ニ付、市来方も御用ニ立ニ依、翌日敵陣切崩し渋谷之緩急さんすへしと被定処、其夜敵陳引退、則城ニも御取合、御大慶不及申、市来方御殿人之しるしニ後十三人子孫有、市来太郎房之事也、

48 聖桑自記

郎子時十・玉利・小田・蒲生・北村・上井・篠原・小島彼是僅四十騎許、誠難當危急之時、各輕命防戦、故退大敵討取許多強兵、應安六年癸丑二月中旬、氏久主欲為都之城後攻、陣天嶺曰、使又三郎君後号陸奥守元久公、版入志布志、君不應之、氏久主數諫言、君漸諾、重親補佐此、君自幼、今臨別落涙不忍焉、向氏親曰、我已定意於戦死、汝全命、而奉仕于、又三郎君可抽忠勲、君可名将矣、其外諸將等察主君父子離愁、皆共啼泣也、

○氏久御代ニ稅所方求麻ノ相良取合、曾於郡ニ馳越、不斷守護ニ敵たるニ依而、大隅之わつらひ是也、杜家嶋津殿へ依無他事、正宮上咲隈ニ陣を構、三年御座有而、「永和三年九月、姫木城没落云々」、姫城之城責め落、守護代として本田親治・氏親父子被差置、其後清水を攻落、御持候処、湯峰ニ而合戦有而穢所子息討死ス、味方ニ茂御内ノ瀬戸口打死ス、此合戦ニ手負疵未調処ニ、（石版カ）、（換カ）、（ふカ）、（氏親ナルヘシ）、（ふカ）、（氏親ナルヘシ）、（換カ）、（ふカ）、（氏親ナルヘシ）、かにと四十二不足、氏頼は前之深手負、此合戦ニハ本

田重親父子、御一家ニハ碓山金吾・伊集院長門守、我もくと思御内ノ人々、小田・北村・上井・篠原・小

島一類、彼是以上甲四十計也、求麻・和泉・山北之衆、

穢所寄合候得ハ敵大勢也、既太刀打ニ被成、前勢面を

一切崩ニ依而、和泉ニ上村、求麻之手ニ友田と云者を始

として討る、其時碓山金吾太刀打して手之程御振舞、

大石を中にして大刀打して岩之かとを切りわりけるに

依而、姫城石原口ニ金吾石と而、今之世迄其石不朽也、

其後御舍弟(兄)上総介殿御名代として碓山金吾、元久より

新納將監、此兩人ハ肥後白川合戦ニ將軍方にて討死有

云々、

49 「見于土持左近將監榮勝軍忠状」

○去年九月之比、姫木城没落之時分、嶋津峰起之間、彼

〔永和三年〕

城為合力大将眞幸院御出之時、御供仕致忠節候、

〔今川兵部太輔満範ならん〕

〔本文書ハ「旧記雜錄前編二」三七六号文書ノ抄ナルベシ〕

50 「見于日本史後龜山天皇紀」

○天授四年〔北朝永和四年也〕戊午九月、征西將軍懷良親王、菊池

武朝・左近將監・清原規善與今川貞世戰于託磨原、破之、〔親カ〕肥後成道寺所藏菊池武朝申状、清原親善申状、

51 「見新納久吉傳」

○為元久主之名代発向肥後州、属 將軍方、於白川遂戦死矣、

52 「見南山巡符録」

○永和四年九月、了俊〔今川貞世〕と菊池武朝と肥後國託問ヶ原に迎

へ戦ふ、官方利あらず、〔菊池武朝申状〕「私考也」此事にて考れハ、

久安も久吉も託問ヶ原ノ合戦に討死せられしハ、此永

和四年戊午九月の事ならん欵、さあれハ久吉傳に 元

久公の名代とかきは誤也、 氏久公の御名代なれと

も、久安ハ伊久公の御名代ならん、左ありて永和四年

より嘉永三年庚戌迄四百七十三年ニ當ル、

〔本文書ハ「旧記雜錄前編二」三九三号文書トホ同文ナリ〕

(別紙)

53 「正文在高山土山下善之丞 見寫」

天神七代

上文略ス

乙卯 阿蘇上官ヨリ水出本堂流、二月廿七日改元八代久盛御庭生、道号義天、永和

丙辰

丁巳

戊午 九月十日、了俊、大内・大友、少貳数千騎肥後寄来、菊池武朝十六歳、於託广原合戦凶徒悉打散

己未 彗星出、三月廿二日改元、

康曆

56 「右文書ノ裏書」

〔本文書ハ、旧記雜録前編二二三号文書ト同一文書ナルベシ〕

〔於カ〕前此上者、向後不可有違變之儀候、且此趣面々可有仰候、仍状如件、

建徳二年六月廿七日 武久在判

酒勾美作守殿

54 ○「碓山仲左エ門」

碓山始良系図

久安

号碓山、法師丸 三郎左エ門尉

永和元年乙卯、於肥後詫間原戦死、法号義山禪

了大禪定門

57 「冠嶽文書」

○補仁〔在〕

薩摩國串木野村内冠嶽東谷西嶽▽〔於〕阿山△別當戰事、到職者、所宛行榮永也、早任先例、可令補任之状

如件、

應安六年三月十二日

〔上總介〕 伊久御判

〔本文書ハ、旧記雜録前編二二五号文書ト同一文書ナルベシ〕

55

「高尾野士和泉氏文書」出水

○野州跡御讓雖拜領仕候、和泉庄地頭職御免之上者、静

珠并一族等知行分事、故殿御時任被定置之旨、不可有

相違候、次永吉内給分人々、杉・朝岳・井口三人内、

此状正文惣領方仁所簡置也、仍當知行分事、何モ任彼状、不可有相違候矣、

建徳二年七月廿八日 伊久〔花押〕

〔本文書ハ、旧記雜録前編二二二四号文書ト同一文書ナルベシ〕

○嶋津上総介伊久代本田圖書允泰光重謹言上

欲早被經御沙汰、豊後國井田郷・豊前國副田庄・日

向國高知尾庄間事、

右、巨細言上先畢、仍彼所領等者、伊久於普代相傳所

領無相違之處、于今御沙汰遲引之條、愁訴無極者也、

所詮九州御退治之間、彼所領等事、可被聞御沙汰者、

御靜謐中間、先薩摩國闕所本宮方之仁等跡注文在別紙進上之、

為彼替令拜領、弥欲抽忠節、次讚岐國櫛無保、信濃國

太田郷内南郷・同國大藏郷、下総國相馬郡内符川・甲

斐御房・發戸・黒崎以下所々知行分事、可預御吹舉京

都之由、先度令言上畢、然早此等條々、急速為被經御

沙汰、粗言上如件、

應安七年六月 日

望申闕所事

一 鮫島掃部助跡阿多郡半分百五十町

一 上益山・同下益山兩村三十町

一 穎娃郡名主職

一 二階堂隱岐守跡阿多郡半分百五十町

井田郷・副田庄者、御方之輩當知行之間、世上靜謐

之間、^(ママ)為井田郷・高知尾庄・副田村、為彼替欲宛賜

之、

〔本文書ハ「旧記雜錄前編」二二六四号文書ト同一文書ナルベシ〕

59 「藤野氏文書」

○ 讓与 〔又三郎久照、北殿コト也〕
生黒丸分

右、薩摩國山門院西方内三ヶ村、所讓与也、但僧にな

すへき之間、けさころもの為斫足、はからひあつると

ころなり、もし弓矢をとり、在家のふるまいあらん時

ハ、惣領生若知行(脱カ)すきなり、仍為後日讓状如件、

〔守久小字也〕
應安七年八月廿九日 伊久在判

〔本文書ハ「旧記雜錄前編」二二七〇号文書ト同一文書ナルベシ〕

60 「比志嶋氏文書」

○比志嶋河内守久範申 薩摩國満家院内十參町名主職事、

本領當知行無相違候、彼仁於御方忠節之段、無異于他

候、仍望申京都御吹挙候、可有申御沙汰候哉、以此旨、

可有御披露候、恐惶謹言、

應安八年卯月十四日 上総介伊久（花押）

進上 御奉行所

〔本文書ハ「旧記雜錄前編二」二九一号文書ト同一文書ナルベシ〕

61 〔親伊作親忠譜〕

○嶋津下野入道道壹申訴訟事、薩摩國守護人嶋津上総介

伊久執申候、仍捧拳状候、謹進覽之候、可被經御沙汰

候哉、於鎮西致忠節候之間、如此令言上候、以此旨、

可有御披露候、恐惶謹言、

應安八年四月廿日

進上 武藏守殿

〔本文書ハ「旧記雜錄前編二」二九二号文書ト同一文書ナルベシ〕

（今川） 沙弥了俊（花押）

62 〔藤野氏文書〕

○五月十三日御札委細承候了、抑如仰雖無何事候、速ニ

可申承候之處、今河了俊以下凶徒、當國山鹿・志々木

原依取陣候、被盡籌策計會云、御在所遠國候間、路次

不程云、無其儀候、背本意候、此堺事、先度者當國之

人大略令組御敵候、今度者無殘所御方候之間、他國勢

縱雖大勢候、對治不可有幾候、筑後事、依御所御座候、

國之仁等申通子細等候、彼云是云、合戰勝利不可有子

細候、就其候、其堺事被致御計策候、凶徒御對治候者、

今時分一勢御合力、就公私可目出候、兼又公方〔仰音〕

事、不可有子細候、處、御使不待其左右、被通御在所

候之間、不及申沙汰候、每事期後信候、恐々謹言、

〔永和元年九〕 六月十日

〔永和三〕 天授三年 謹上嶋津上総介殿

御返事

〔本文書ハ「旧記雜錄前編二」二九六号・「同附録二」四三三号文書ト同一文書ナルベシ〕

63 〔末吉士羽鳥氏文書〕

○ 薩摩國御家人國分豊後守久成申軍忠事

右、於國致忠節之段、守護人嶋津上総介伊久度々令注

進之間、達、御上聞畢、隨而去去年應安七年自十二月、

久成令當參谷河御陣之時分、數日令在陣早、同八年四

月八日、肥州日岡御陣被召之刻御共仕、同七月十二日、

菊池水島御陣被召之時、抽忠勤之条、無其隱、然早於

于國、云戰功當座、云忠節、且預京都御注進、且下賜

御判、為備龜鏡、恐言上如件、

永和元年七月 日

承了(今川了俊)
(花押)

(本文書ハ「旧記雜録前編二」三〇〇号文書ト同一文書ナルベシ)

64 肝付河内守兼氏譜中

○永和元年乙卯七月、鎮西探題今川伊豫守貞世了俊入道將陣

肥後池池、徵兵於(師久)定山公(氏久)、齡岳公等、八月十一日、了

俊會、公於水島池池、小貳冬資不來會、了俊使、公徵之、

冬資乃來、二十六日、了俊令賊殺冬資於水島、二十八

日、了俊偽薦、公代冬資為筑後守護職、以徵、公、

公欲行之、從臣曰、勿往矣、公曰、不往怯弱、少隊

赴之、伊地知民部季弘・本田二郎氏親等從、衛卒固門、

不得從内、氏親持太刀堅請内之、季弘亦續、於是、公

會了俊及今川兵部大輔滿範、一説 範氏乃享、公酒、滿座

惴慄、如意狙、公、了俊且告曰、小貳狎邦故討平之、

卮酒三行、公乃起飯客舍、留書還國、書曰、幕府

命、島津・小貳・大友鎮九州久矣、今招冬資欲共竭忠、

却賊殺之、豈得不耻乎、

65 「見于南山巡狩録」

○後龜山院天授元年乙卯、北朝永和元年

八月小

廿六日、肥後國に於て太宰小貳冬資、今川伊豫入道了

俊と相戦ひ、終に討死す、花營三代記、廿九日、嶋津(マヤ)

越後守筑後の守護と、(なり脱カ)時に嶋津は京方なりしかハ、今

川了俊か許に書を贈り、武家の古實を尋ね問ふ、了俊

か返簡に曰、錦のひた、れは先祖一代ゆるしを蒙れば、

子孫永く是を用ひ、白旗ハ其陣に一流に限るへしとな

り島津氏古文書、○世に今川了俊か大草紙といふ書ありとい

へとも殘闕なり、本文にしるせし条目は、今傳ふる所

の大草紙に逸せるや否、いまた其詳なるをしらす、

66 「藤野氏文書」

○ 今日吉日候之間令申候也、

今夕罷出當陳候、即可申候之處、期明日之參會候之間、

遅々仕候き、抑にしきのひた、れの事承候、先祖一代

御免候へは、子孫相續無相違事候、尤御用候ハめてた

かるへく候、可存其旨候、御旗事ハ、其陳ニ一流之外、

不用事候間、御所持までたるへく、如何様御ひた、
れの事ハ、殊ニ可目出候、心事入見參可申承候、恐々
謹言、

〔永和元年〕
八月十日

了俊（花押）

嶋津越後守とのへ
氏久公

〔本文書ハ「旧記雜録前編二」三〇四号・同附録一五〇九号文書ト同一文書ナレ
ベシ〕

〔正文〕

○「口切レナシ」

一 幸府越前守御方へ音信あるへく候、使者ハ久富たる
ハサレシ御書ニモ酒勾新左エ門入道令進云々とアリ、同人ならん
へく候、若酒勾新左衛門上候ハ、是を可被遣、

一 兵衛佐對面事、種玄に申「つか」けらるへく候哉、是
にても中務入とに談合候て、可被計候、

一 菊地若犬追物其外の弓矢の事物射候様なんと尋申候
ハ、おやにて候者ハ、すこし物をも仕候へとも、
〔師久公ヲ指シ玉ナラン〕
〔伊久カ〕
我ら事ハふたん合戦候間、けいこ仕たる事もなく候、

「おう」かた存知せず候よし仰らるへし、かやうに被
仰候者、おくゆかしく候へく候、物の一も申おさ□

ニて候、また尋候時、別事ともしられ〔すて、〕、は
〔候ハ〕

ぢたるへく候哉、

一 今ハ御へし者在と存とも、若犬追物被射候へなんと
〔御返事〕

申候ハ、かたくしたい候へく候、手負候て後ハ、

更〳〵弓をよくも引立す候よし可被仰候、

一 越後殿と若寄合候ハ、さか月の事、始度ハつよく
〔氏久公歟〕
〔辞宜〕對
しきたい候べし、其後ハ酒月こなたとらるへし、

代々すこしもかハリそを候、太方ハこしもますますくて
候へバ、つよくれいをせられ候する事しやうきたる
〔禮〕
〔正義〕

へく候也、

一 若菊地と寄合候時、車内八郎殿よハる、事も候ハ、
床敷に候とも、太刀のしきたいハ候へし、是にての
ことくつよくハ候ましく候、やとに人も候ハで寄合
ハれて候時ハ、これにかハリめ候ましく候、大方に
てハ心得られ候へく候哉、

一 被上候する路にてあハひよく候とも、追出犬いられ
候ましく候、まして人の家ちかく候所にて、犬なん
どいられ候ましく候、
〔射ラレ〕
〔近ク〕

一 菊地、同はかたの宿にての振舞、これらにてのごと
く、殿原とうへしたもななくうたひとしめき、くるハ
〔水島ナラン〕博多
〔上〕
〔上〕
〔上〕

〔東郷九代薩摩守重明幼名歟〕
〔御國元ノコ〕
〔宿〕

る、候事ましく候、かへこられ候ましく候あいた、

御酒へふた「不斷」ん人も見候とおもハれ候て、身を直せら

るへく候也、

一「渋谷五家ノ二」高城小太郎、若對面し候ハんと申候ハ、

於國おやにて候者と御ふくわいの事にて候間、入見參候事、

所存に御か、り候よし可被仰候、

一「使カ」御つかい定可来候、其時者もてなされ候て、よく

く、あいら「領カ」し「領カ」ら「領カ」ハれ候て、御本預入部候時者、可

承候、雖不甲斐候可合力申候、若御下も候ハ、同道

可仕候、於國子細候ましく候よし、よくく物語候

へし、

一「此御方宿」若菊地宿へも来候ハ、庭ニ出合れ候へし、立候す

る時も庭まで可被出候、下ハ咄候へとも、小櫻のよ

ろいひかれ候へし、當座にて候ハすとも、後にをく

られ候へし、若さ「座敷」しきにて出され候ハ、久富「山

田弥「田弥」二郎ト云人総州家ニアリ、應永記「見ユ」ニ見ユ

二郎にか、せらるへし、上手久富たるへし、よろい

ハうしろをかき候か上手にて候、よろいをまいらせ

候時ハ、そハ「側」ハおおかす候、前にをかき候、よろいを

かきて前にをかき候時ハ下手かきて候、物引「候」ト人

前にちかつき候、あまりハちかくよらす候、すこし

とをくおき候て、そバ「御出」へなをり候て主の前へをしよ

せ候也、赤星おりて候ハ、馬ひかれ候へし、上野

ニ引せられ候へし、若と「通世」んせい物候ハ、小袖一と

らせられ候へく候、それハ後にやられ候へく也、諸

事あれにての「候」こしつハ、種玄「石塚大和入道」に申合られ候へく哉、

恐々謹言、

一「永和元年乙卯ナラシ」八月廿七日

〔本文書ハ「旧記雜録前編」二三〇八の1号文書ト同一文書ナルベシ〕

一此御書ハ、永和元年 氏久公今川了俊ヲ肥後菊池水島

ノ陣屋ニ訪玉ヘル時、 師久公ノ御嫡子 伊久公モ參

陣シ玉ヒツラン、其時 師久公ヨリ進セラレシ御書ナ

ルヘシ、 氏久公ノ行キ玉ヒシコトハ聖榮自記ニ委シ

ケレド、 師久公ヨリノ事ハ見ヘス、但聖榮其年月ヲ

略ス、室町記ニ年月考ラル、也、○永和元年八月廿六

日午尅、今川了俊小貳冬資ヲ肥後ノ陣中ニ殺セシコト

室町記ニアリ、此時 氏久公モ參陣セラレタルコト聖

榮自記ト合フ、然トモ 氏久公ハ冬資カ變ヨリ俄ニ販

榮自記ト合フ、然トモ 氏久公ハ冬資カ變ヨリ俄ニ販

ラセ玉シト見ヘレハ、伊久公ハ右ノ通 師久公ヨリ
仰出シアリシカトモ、氏久公ノ帰リ玉ヒシヲ聞召、
参陣ナカリシモ知ベカラス」

〔本文書ハ「旧記雜録前編二」三〇八の2号文書ト同一文書ナルベシ〕

68 〔應永記之内伊久公御案文二〕

○肥州託麻原ノ御合戦之時ハ、舍弟三郎左エ門尉・新納
ノ左近将監御目之前ニ而討死仕候、ケ様之忠節掛テモ
被思召寄御氣色モナク、小貳冬資事者、九州三人之可
為親昵之由、享御意処也、已ニ於水島被討申候、依其
恨、歎之顔色薄面目罷成、在國仕候云々、

69 〔大日本史足利義満傳〕

○天授元年秋、今川貞世與少貳冬資戦、殺之、花營三
代記

70 〔室町記卷三〕

○永和元年乙卯八月廿六日午尅、於肥後國軍陣、太宰少
貳冬資為探題今川伊豫入道被誅之由、使者到来、

71 〔聖業自記〕

○探題より度々ニおひて被仰下趣ハ、九州三人之警固た
るニ付、無音不可然、早々在津候者、諸事談合可被仰
付旨、御注進及数ケ度、探題職ニ有下向延引之条、可
為仁儀ハ緩怠之至と而、氏久御上ニ定早、遠國なれば
御勢ハさほとなし、宗との御内之人計なり、六ヶ國江
御上、探題ニ有御對面、今川殿之御奔走被悦喜、殊ニ
御感望(威力)も見得候云々、

72 〔戰伊作久義譜〕

○一日預御状候条、于今悦入候、抑奥州上洛事、無是非
治定候由、度々以而使承候間、貴方様(元久)ニも同前被申候
哉、随而我々間事、奥州参洛候はんするにハ、在國事
かつけ事、無方便候間、上意憚存候、誠奥州参洛候者、
就諸事雖難叶候、罷上候ハて者、難成(巻)至極候、か様大
綱各申談候、進水平入(道へ)、愚意条々此仁申含候、
定可令申候哉、不殘御心底、此御返事承候者、本望候、
恐々謹言、

九月十六日

伊久（花押）

伊作殿(鳥津久義)

〔本文書ハ「旧記雜錄前編」二二三八号、「同附録」二五七四号文書ト同一文書ナルベシ〕

73 藤野氏文書

○去月十七日御状今月十二日到来、委細承候早、抑其方様御事、属無為候、仍可有御出津之由承候、先以目出候、定探題悦喜(申候)之哉、則彼方御返状、付遣之候、兼又京都御礼御申事目出候、随而代官安治方(申候)ニモ、種々拜領之由申下候、不思寄事候、乍去御(申候)之至恐悦候、尚々恐入候、雖不甲斐々候、自然候之時者、可立御用候之旨申付候、将又筑後凶徒對治事、去月廿二日、馳渡長田(河)「欠」候、於溝口及合戰候、則時打勝候、仍菊池武朝家僕等以下三百余人討取候了、其身事者具足切捨候、落散候、當日肥後山鹿ニ罷着候、其後取籠菊地陣城候之間、自是差遣一勢候、又貞公致籌策候之間、依難堪(忍候)「欠」与、今月七日捨在所、山中ニ逃籠候、於今者無差事候、其段先日ヨ阿弥陀仏申候、遁世人被参(候時)「二付」、委細令申候、定(定)参着候哉、尚々京都事無御等閑(候)之様、連々被申候者、尤可目出候、他事

併期後信候、恐々謹言、

〔永和元年カ〕

十二月十三日

〔大友修理太夫〕
親世在判

〔右、伊久公ニ進セシ書ナラン、埃考〕

〔本文書ハ「旧記雜錄前編」二二三〇号、「同附録」二五六九号文書ト同一文書ナルベシ〕

74 藤野氏文書

○畏申上候、抑嶋津(前)上総介申、依自訴之事、京都御吹拳事被申候、無子細御申御沙汰候者、畏入候、此間度々吹拳事、雖被申候、代官之間者、不可叶之由、先立堅蒙仰候之間、斟酌仕候之處、子息之事者、自身同事候之間、不可有子細之由、依蒙仰候、申上候、以此之旨、可有御披露候、恐惶謹言、

十二月廿五日

宮内大輔三雄在判

進上 周防右京亮殿

〔本文書ハ「旧記雜錄前編」二二二・三三二号、「同附録」二五五六号文書ト同一文書ナルベシ〕

75 藤野氏文書

○「欠」國事、御一跡并所々「欠」▽以下△不日ニ安堵(ハ)被成(若)「欠」うたかひ候ハ、日限をさして承候て、其中(候)

田圃書允奉光言上セシコトノ返答ナルヘシ、
に〔久〕堵をとり進候へく候、身か私曲〔久〕方の御

〔御案〕

〔候〕

〔公〕

あやまり候哉いなやみえ候へく、あまりに、今

度承候分無念候、御あやまりかと存候間、以使者平子

若狭權守申候、此左右ニ付て、重々可申承候、た、し

ハや伊集院禪門方に委申承て候しかハ、定被申行候哉、

然者可目出候、越州御進退を猶とかくたすけ申され候

〔氏久公〕

はんために、御現形遅々候てハ、京都御うたかひ弥候

ぬと存候、御急可然候、恐々謹言、

〔永和二年カ〕
四月八日

了俊在判

嶋津上総介殿

〔伊久〕

〔本文書ハ「旧記雑録前編二」三三七号・同附録二一四三号文書ト同一文書ナ
ルヘシ〕

76 〔公〕

○また治定ハ不承及候へとも、去比又野部城にて合戦

被仕候とやらん間候、これハ薩州より急と御張行候け

ると聞候、実事候者は又無勿株候、如此事をこそ京都

にもうたかいおほしめさる、事ニて候へ、所詮何の儀

も候ましく候、た、先御出陣たに候て、是事御合力候

ハ、何事を可有御所存候哉、相良近江方へ人遣候之

〔前題〕

間、可然便宜候之間申候、此仁も御出陣候へきよし承

候欵之間、令悦喜候、重洪谷人々方へも状を遣候也、

恐々謹言、

〔永和二年カ〕
八月十九日

〔今川伊与守〕
了俊

嶋津上総介殿

〔本文書ハ「旧記雑録前編二」三三五号・「同附録二」六八号・「同附録二」一四
三三三号文書ト同一文書ナルヘシ〕

77 〔聖業自記〕

○明る正月の比より一家ノ内談調ければ、御神水有而一

〔永和三年ナリ〕

〔天隅守〕

〔久氏入道〕

筋ニ御合戦を定早、御方ニ者伊集院・伊作・鹿児島・

〔備カ〕

大隅・下大隅・大始良計なり、総州よりハ和泉四ヶ所

〔四ヶ所与者高城・東郷・入来・邪答院なり〕、山北ニ被隔

〔分注トミユ〕

候間不及力、総州与者師久方御兄方、其比両守護一比

〔探カ〕

ニ有、依而無合力、一族ニ者谷山より南方、市来・洪

谷・菱刈・牛山・求麻・眞幸・伊東・土持、坂より上

〔永和三年〕

ニ者柘寝・肝付・飢肥・櫛間なり、二月中旬ノ比より

本陳天下峰ニ打寄、財部取合、日限三月一日ニ被定云

々、

78 〔都城本田氏文書〕

○下 本田左近藏人兼久分

右、山門院西方之内、祖父兼阿之跡村と同散在田藪等

事、有注文
別紙、早任先例、可知行之状如件、

〔當永和三年丁巳〕

天授三年六月卅日

伊久〔花押〕

〔本文書ハ「旧記雜錄前編二二三七五号文書ト同一文書ナルベシ」

79 〔藤野氏文書〕

○筑前國須江庄半分事、任預状旨、沙汰付嶋津上総介代、〔伊久〕

可取進請取状之状如件、

永和五年三月十三日

〔今川了俊〕
沙弥在判

中野入道殿

那知入道殿

〔本文書ハ「旧記雜錄前編二二四〇三号文書ト同一文書ナルベシ」

80 〔写在藤野氏〕

○嶋津又三郎令同道可參洛事、尤所令然也、不日可有上

洛之状、依仰執達如件、

明德二年九月八日

〔細川頼元〕
右京大夫在判

嶋津上総介殿〔伊久〕

〔本文書ハ「旧記雜錄前編二二四八九号文書ト同一文書ナルベシ」

81 〔聖榮日記〕

○元久御代、上総介伊久・嫡子播戸守守久父子不快ニ成、

師久方末也、既ニ河野邊城ニ對、平山と云所ニ差寄、

一陣を取、奥州より御合力なけれハ、何方よりも其分

なし、數日ニなれば折と不可然之通を元久仰有ハ、陣

を開薩戸の郡へ退、総州より奥州江被仰出ハ、題目嶋

津之家ハ必々元久之所ニ可有、可然ハ忠久より以來代

々傳候小十文字太刀・同鏡可進之由被仰遣、御返事ニ

ハ、實子御座候上ハ不可有事と御返事有、重而如此於

承ハ、他人之手ニ渡し候する時ハ可為口惜次第、家之

嗜も候ハ、御受取可然候由被仰、此時兎角之儀なし

と而、畏入候と御返事ニ付、誰して請取候するや、是

よりも其旨心得用意と仰有、又其時俄之様ニ談合有而、

親類ニ者山田右京亮、内之者ニは伊地知民部少輔可進

由被仰、総州よりも親類ニ者阿蘇谷、内之者ニハ石塚

大和守、中途田中ニ而請取、御劔ハ阿蘇谷方持而山田

82 〔忍翁公御譜中〕

方へ被渡、からふとの内迄伊地知方能と見せ而為請取
被申、爰ニ田ノ中の仕付ハ座敷ハ清けれ共、寺家邊ハ
祝言也、在家ハ御家を御執事有ニ依也、奥州よりも其
後種々御祝言御禮有也、総州之御意難有子細を存る事
ハ、鳴津家ハ陸奥守殿所ニ可有と如仰、元久より以來
當御代、殊以御繁昌候事を無心得方、総州方ハ不吉ニ
御座候御うわさも如何と申人も有、弓馬其外武方之一
道ハ総州御方より出たる事也、努々落着有間敷事共也、

○上総介伊久與嫡子播磨守守久父子不快、且為胡越之隔、
守久不顧天倫、欲攻伊久之所(往)居川邊(之)城、而引
率軍衆、對陣於平山、雖經數日、未嘗有勝負、元久(不)
敢合力、且曰、父子鬪乱無是非之可言、速(可)有退陣
焉、故守久重命屈理、徒開陳而退去于薩摩郡也、其後
伊久使一价(言)元久曰、高祖忠久以來代々所相傳之小
十文字太刀・同鑑在吾家、可附與于元久也、元久報曰、
伊久數輩之有實子、何以代々重器與于予乎、伊久又曰、
辭退如此、則當家寶器後來必可為他家之用、然則於末

83 〔忍翁公御譜中〕

世可口惜、早令領納、可成國泰民安之計者是幸也云々、
因茲元久曰、今也無所固辭、互定(於)授受之役矣、自伊
久者阿蘇谷周防介・石塚大和守、自元久者山田右京亮・
伊地知民部少輔也、太刀者阿蘇谷、鑑者石塚為使役、
而於川邊兩城之田間授之、太刀者山田、鑑者伊地知受
之矣、所以受于田間者、不無其故、雖有寺院非慶
賀之席、士卒庶民之陋室何用之哉、以故如此也、其
後元久寶器領納之報礼至重、不可勝言也、爰播(守)廣守
久者、雖伊久之為嫡子、重代之宝器不讓與于彼、而讓
于元久、依之時人有兩様之謳歌、一則曰、觀元久之威
儀、則宜執三州權柄、納子房於胸臆、施武略於他邦、
豫慮知之、而如斯乎、伊久之遠慮神妙也、一則曰、累
代之重器雖為一族、與人空已可謂愚也、未知孰是、
○伊久味方漸減、而川邊亦為孤弱、雖然有兩津坊津泊津之未
變為助、故使士卒為警衛、爰伊集院某襲至、而警固勇
士悉以屠殺、於茲乎、不得在宅而去川邊於元久、所以
伊久退薩摩郡也、

(本文書ハ「此場除ベシ」トシテ朱ニテ削除サル)

84 〔全〕

○上總介伊久居住薩摩郡碓山城之際、有使本田信濃守忠

親通蜜事、為相談曰、亡父 師久法師道貞、自在碓山

之時至于今、渋谷一族背當家為讎敵者、於薩隅日諸所

十有七ヶ度也、由是請下大將者、亦數度也、其憤無所

欲止、高城・入来阿城之際撰要害地、設陣欄犯侮、則

渠之一族馳以援来、暨此之時、可決勝於一戦云々、元

久報曰、忠親所傳之命委曲所以承知也、未報渋谷之憤

何敢可不遂乎云々、

85 〔應永記〕

○上總介伊久以本田忠親、元久ニ有ハ御談合、渋谷一族

此多年向當方致不忠、三ヶ國於于所々拾七ヶ度也、

大將申下度々也、先高城・入来之間、可然在所於構

取大陣者、彼一族定可馳奇、其時押卷可決安否被仰、

元久御返、以本田蒙仰子細、先以目出度畏入候、愚

身山西・高木ニ可致沙汰事候、急々馳參可申談候之由、

86 〔正文在官庫乎〕

○御吉兆申舊了、抑一昨日、以御使節蒙仰候田邊田村事、

當年一作過候者、自下地彼方へ可遣候、聊不可有等閑

之儀候、恐々謹言、

二月廿五日

御屋形

守久(花押)

(本文書ハ「旧記雜録前編二五四一号・「同附録二」五七五号文書ト同一文書ナルベシ)

87 〔忍翁公御譜中〕

○上總介伊久前如所言、應永二年乙亥八月十日、欲犯^⑧

高城之城、構陣營於横峯、雜除作毛之際、元久使新納

氏・和泉氏、往高城陣談渋谷退治之道曰、欲率日隅二

州之騎歩、到^⑨其地增勢、爰有不嫌我心者、匪啻經遠

路越山中、有大川之不可徒渡、而無軍衆之可往還渡舟、

我之所以願者、發軍衆於山田、築陣營於高牧越年、而

今河殿上洛、博多ニ逗留之事難叶候之由申候之間、以千葉方之媒介、肥前ノ小城ニ被落集候、小貳・菊池奔走候、彼一類家僕等皆一所ニ候、近日可出陣候欤、九

(本記事ハ「旧記雜錄前編」二五五〇の1号ト同文ナルベシ)

向于樋脇・前田・市比野、則端城悉以不得警衛乎、俟其變得佳期、從吉田・蒲生越一之山、直入于入来、則其勞少、其功大乎、伊久隨此議、而同十二月、構一陣於高牧、徒越年矣、

【應永記】

○同二年乙亥八月十日、總州高城ニ押寄、而橫峯ニ御陣ヲ被召、所務ヲ被拂畢、懸ル処ニ奥州ノ御使者新納殿・和泉殿兩人有着陣、其意趣者、高城之亘、日向・大隅之軍勢為遠所上、云山、云河、征路之往復大綱ニ候、

山田ニ打寄テ高牧ニ被召大陣、年明テ樋脇ノ前田ト市比野ニ發向被成候者、彼ノ端城共不可消、其時吉田・蒲生ヨリハ山一ツ隔候、尤入来之事ハ可輒候ト此儀ニ定也、然處ニ大友殿書状到来ス、其文ニ云ク、

總州ノ御返状ニ云ク、
 今月十六日ノ御状同廿二日ニ到来、謹拜見候、抑今川殿上洛之亘承、悅無極候、如御存知、三ヶ國之凶徒等、此一家ニ企ル隱謀叛逆之族ニ、被副力被差下大将之事、御意趣何亘候哉、鎮西下向ノ手合セ麻生山之合戰ヲ始トシテ、木山・所隈・山崎・瀬高・北郷・河原ニ至ル迄、御馬之口ニ不付云コトナシ、殊ニ以肥州託麻原ノ御合戰之時ハ、舍弟三郎左エ門尉・新納ノ左近將監御目之前ニ而討死仕候、ケ様之忠節掛テモ被思召寄御

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二五五〇の2号文書ト同一文書ナルベシ)

謹言セシ故召返サレ、泷川左近將監義俊下向ストアリ

謹言、
 【應永二年乙亥】
 八月十六日
 親世在判
 謹上 嶋津殿
 【九州探題大友修理太夫】

【南山巡狩録ニハ、嘉慶元年、大友ト大内介トヨリ足利義滿ニ了後ヲ

州之大儀、一人而難計候之間、大内方遣状候、未無返^{イナシ}札候、落髮之由聞得候、法名義弘ニ候之哉、就中播磨守對奥州御陣合戰之由承候、定而不可有指事候哉、恐々

「永和元年卯八月廿六日午時、今川了俊誅冬資於肥後
氣色モナク、小貳冬資事者、九州三人之可為親昵之由、
陣中事見室町記」イイニ
享御意處也、而ニ於水島被討申候、依其恨歎之顔色薄

面目罷成、在国仕候、有自然之次者、元久為先馳上り

可致御合力之由、挿心底候之、(脱力)被成背上意上洛之事、

尤以本望也、以此首途入来発向之事、定テ可達本意候

哉、當陣之事御使者護阿弥委細可被申候、恐々謹言、

「應永二年」
八月廿三日 前上総介伊久

謹上 大友殿

御返事 「自奥州方茂御同心之趣」

〔本文書ハ「旧記雜録前編二」五五〇の3号文書ト同一文書ナルベシ〕

左ル程ニ、自奥州被仰之通市来殿ニ有御談合、忠家可

然様ニ被申上ケレハ、總州御悦喜無申計、元久如御計

山田ニ有勢揃、高牧ニ被召御陣有御越年云々、

〔本文書ハ「旧記雜録前編二」五五〇の4号文書ト同一文書ナルベシ〕

89 〔應永記〕

○同丙子正月十一日、拂山被作路下、其夜ハ樋脇ノ城落

畢、同十三日、前田ノ城攻落ス、同十九日、市比野城

落了、御方三城ニ取乗ケリ、吉永被本補、去程ニ三ヶ

90 〔惣翁公御譜中〕

○同三年丙子正月十一日樋脇、十三日前田、十九日市比

野、三之端城「二月十八日、上総介伊久在判二階堂山城守行貞ニ
被遣之」没落矣「平」、俟夏日催大軍欲攻清色之

際、「三」洪川右兵工佐満頼為鎮西探題職下着于博多也、速

有可參津之「四年」、由是欲使弟次郎三郎久豊與山城守忠朝、

称伊久・元久兩輩之代、来春赴夫津、所以攻清色之緩

謀略也、

91 〔載于伊作譜〕

○薩摩國東郷之内渋谷薩入道重佛本領地事

右、為料所預申候也、任先例、可被致沙汰候、仍之状如件、

應永三年二月十八日

(鳥津伊久)
道哲(花押)

伊作大隅守殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」五六四号文書ト同一文書ナルベシ)

92
【應永記】

○同四年丁丑四月下旬ニ、清色ノ城ニ被押寄、山北ヨリ

モ前上総介伊久為大將、嫡子守久・始良三郎左工門尉

忠安・阿蘇谷出羽守興久・子息四郎助久・伊地知加賀

守是カ・下野ノ宗十郎・信濃左近太夫、御内ノ人々ニハ酒

匂伊豆守伊景・本田次郎守親イ重・天辰肥前ノ小次郎守經・

中条ノ因幡守政春、近隣ノ御家人ニハ國分ノ左衛門尉・

羽島ノ豊後守・執印豊前守・永利長門守イ介・宮里若狹守・

石塚對馬守、南方不殘被打立、都合二千餘騎、各相幟

指上被打立計利、自鹿兒島者陸奥守元久為大將、新納

越後守實久・北郷讚岐守・樺山安藝守・佐多和泉守・

河上、御内ノ人々ニハ本田・酒匂・阿多・平田・肥後・

石井・伊地知・上井・鹿屋・猿渡・田代・長野・千代・

向田・北原、皆成一人當千ノ思、月杉之阿一揆、此ヲ

前途ト馳重ル、自山東者伊東・土持・宮崎・跡江・木

脇・清武・曾井・佐々・宇津・岡富(縣)・盛長・八代・

財部・飯田・石塚・岩千野・白糸・綾・池尻・穆佐・

加江田之軍兵、飫肥・櫛間・和田・高木・真幸・菱刈・

馬越・平良・曾木・栗野・税所・加治木・平山・平松・

平瀬・中津野・餅田・吉田・蒲生振底打立、都合五千

餘騎、其コソガ古本ハ念當前馳重、伊久・元久・頼久野頭ニ

被構大陣、信濃守忠親杉一揆ノ為大將、滿手野マテノニ取陳、

守久・久義木場ノ原ト黒瀬ニ取陳被堅、越後守實久月

揆(脱カ)ノ大將ニテ、壽昌寺ノ峯ニ取上リ被堅、依之通路切

了、相ノ牆ノ邊リ二里十五丁ト云云、河ハ淵瀬ヲ不嫌、

山ハ岩盤石ヲ不厭、夜者燒篝守之、今於爰舊懼胆節云

事アリ、昔年道貞ヲ碓山ニ奉卷箆被仰ハ、南方ヲ雖頼

隔通路更難通、疲終ハテテ、後ニ切腹可見苦、度々被思召

切有其色、乍去國分ヲ今一度可憑有御意、以種々ノ方

便御、心底ヲ國分ニ被通、國分方今ニ於テハ命ヲ捨ルヨ

リ外者無才覺トテ、次男ヲ一味之陣ニ召合被差置ト有

領掌風聞セシカバ、執印方ハ不及申、市来ニ有其疑、氏久差寄而有計策、伊集院・伊作同心之間、七陣破却了、國分忠節於守護方千端萬緒難申、子息之哀者、兵具ヲ相副エテ被送トソ承リ、自碓山以本田與一、次郎四郎殿ヲ無事故被歸候事、目出度候之由被仰遣泉流、道貞如此及難儀給事モ、依渋谷ノ謀叛也、亦高江ノ内峯ノ城ヲ責落シテ、宗徒ノ侍三十八人切腹畢、是亦非渋谷之計略哉、然者今度於清色欲被遂日比ノ宿意、縱唐ノ花蠶雪會稽山之耻、越王勾踐天下之主奉成、吳王夫差如討、仍城内ノ一族悉被取竈間、城持勢雖無不足兵糧盡ヌル間、定テ道口ヲ乞テ没落畢、弓矢ノ儀理モ淨ク同心シテ、無二乍敵被褰ケリ、去程ニ上津之御船肥前ノ寺江ニ付ク、同國新山ト云処ニテ、御兩人探題〔イ新五郎〕ニ有御對面、為其禮渋谷殿御出候間、四月廿日、田手〔イ平〕寺兩人御宿一所ニ而被懸御目、及曳燭之間、修理亮殿ハ持蠟燭門外ニ參候、同山城殿庭上ニ畏テ探題ヲ被申請、探題御兩人ニ有一禮、右ノ座角ニ御座ス、山城殿御座敷ニ直リ給テ探題ニ跪キ、低頭シテ亦庭ニ下テ請〔松一〕板藏殿、修理亮殿深有禮、山城殿挺ニ上リ給ハ、修理

亮殿・板藏殿挺ニ被參、探題兩人此方ヘト以近習被仰、山城殿修理亮殿ト板藏殿ニ有堅禮、座敷ニ被參、從探題者一帖程下テ左座ニ直給、修理亮殿モ板藏殿ニ有一禮、渋谷殿自御座敷御座次、板藏殿モ依右ニ被參、山城殿有御酌、次ニ探題御酌取、銚子柄ハ檀紙ニテ被裹、兩人者御酒ヲ給リナサル、其夜ハ新山ニ御帰院也、然間春夏秋マテ御膝ノ下ニ有堪忍、十月下旬ニ御暇被給有御下也、依清色落居諸軍勢皆被打歸云々、

93 〔惣翁公御譜中〕

○應永四年丁丑四月下旬、與上総介伊久法師久哲俱議、欲攻清色城、元久自將而發於覺嶋、相隨軍衆新納越後守實久・北郷讚岐守・樺山安藝守・佐多和泉守・川上・本田・阿多・平田・肥後・石井・伊地知・上井・鹿屋・猿渡・田代・長野・千代富・北原・伊東・土持・宮崎・跡江・木脇・清武・曾井・佐々・宇津〔⑩縣〕・懸・盛長・八代・財部・飯田・石塚・岩千野・白糸・綾・池尻・穆佐・海江田・飫肥・櫛間・和田・高木・眞幸・栗野・菱刈・馬越・平良・曾木・税所・加治木・平山・

94 「惣翁公御譜中」

平松・平瀬・中津野・餅田・吉田・蒲生五千餘騎、久哲領土之兵二千餘騎、共八十騎到于其地、久哲・元久・伊集院彈正少弼頼久構大陳於野頸、本田信濃守忠親杉一揆之將師構陣於滿手野、播磨守守久・伊作大隅守久義構陣於黑瀬與木場原、新納越後守實久月^(一)揆之將師^(師)構陣於壽昌寺之峯、如此者陣無通一線之緩路、且復不撰山谷磐石、結間垣者殆三里堅密也、所以晝夜攻責非言語之所得述、城中士卒有餘、兵糧不足、諸卒力倦、矢竭弦絕、是以不得警衛、而乞通路之宥免、降城沒落、故薩隅日三州屬無為也、

○先是應永四年丁丑十二月、伊作大隅守久義有宿意之未散別府某者、欲遂其憤、率師旅渡大川、構陣於鷓之塚、陣幕未成之際、發精兵犯當陣、久義之兵不多而不得進于陳外、徒越年矣、於茲乎、伊久法師久哲餽書簡曰、伊作某與別府某已起鬪乱、若不止之則漸可為^(一)中國^(國中)之錯乱、庶幾令新納越後守實久成和諧者是幸也、由是招實久使之諫以開陣也、田布施之二階堂某者久義之娣娣、

95の1 「應永記」

而別府某者二階堂之娣也、故二階堂不得孰是孰非、而不合力於久義、久義含其情欲報恨於二階堂、而告之於元久、元久慮後之有傷害、容久義之訴、而且應永十二年^(一)乙酉之△冬云、

○同五年戊子正月十二日、總州有御越山申木野御逗留、仍于市来・吉田ヲ有御憑之由被仰、兩人ノ御返事ニ云ク、彼方ヲ御企雖難存候、手ヲ不及摺申、於于別府者亦無可申子細モ候、依御意憚申、合戰ヲモ不仕候由被申之處ニ、下野守忠頼市来ニ被申遣之通念頃也、亦吉田若狹守清正申木野ニ被參而、年始之禮儀被言上畢、依別府之哀、早々御越山目出度候、上意之趣者大方奉候間、此上者不及私ノ才覚候ト申テ被立ケリ、總州彼方此方ノ義理、何モ道理至極セリトテ、鹿兒島へ被御状ヲ遣、其状ニ云、

(本記事ハ「旧記雜録前編」二五九八の一号ト同文字ルベシ)

95の2

新春之御大慶千喜萬悅不可有盡期候、抑伊作方之振舞、

國之乱共可成候之哉、渋谷一族多年搦野心候間、去年以御合力加退治候畢、隨而探題方之御事、以子共應對申候キ、春永市來邊ニ參會、國中^①有催促上書之趣キ申上、亦去年之御辛勞欲令申候之處ニ、私之噉訴不及了簡候、此段新納方ニ有御談合、被加諫候者、可目出度候、恐々謹言、

正月十四日

(島津伊久)

沙弥久哲

謹上 大隅殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二五九八の2号文書ト同一文書ナルベシ)

其御返状

如蒙仰候、今春之御吉兆越例年候間、萬事日出度本意満足候了、抑伊作方^又楚忽之至ニ候、實久被打越候者、急速ニ彼陳被引退候様ニ可申談候、兼又唯相似次候、^(難カ)去年舍弟次郎三郎・山城殿御供申、探題方之事償申罷下候、依月迫、此子細ヲ不令申候、京都之事者山北ニ參向可申定候、恐惶謹言、

正月十六日

藤原元久在判

進上 酒匂伊豆守殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二五九八の3号文書ト同一文書ナルベシ)

去程ニ越州ハ大ニ有驚、以本田次郎左エ門尉、伊作殿有教訓、仍諫鼓打音重レハ荊鞭モ難朽、久義聽而引退畢、総州有御悦喜、山北ニ御帰候、其年三ヶ国屬無為、

(本記事ハ「旧記雜錄前編」二五九八の4号ト同文ナルベシ)

○同六年己卯夏之比ヨリ、物言ヒ國中ニ充滿シテ、皆人成疑、両殿御中余甚深シテ、総州三男黒殿ト申ヲ元久ノ有養子、又三郎久照ト名乗給ヲ、鹿兒島ニ有屋形作、式部山田、酒匂ノ亦次郎、上井ノ神五郎、山田ノ弥次郎被差副、唯楊貴妃玄宗皇帝恩幸ノ時、楊國忠カ如榮、時ノ人嘲云、国忠入門、暖風ノ如扇面有落言也、富貴家ハ可成有加様、餘北風ノ厲サヨト云人モアリ、北殿ト依申也、養子之亶、始終不可然、被呷臬流處、果シテ十二月、肥後・石井・伊地知於下大隅被討畢、

○薩隅日三州漸屬無為、貴賤歡樂歌市并野矣、(應永六)

年已卯之夏、忽國中老若往々為疑者不少焉、雖然久哲

與元久宛如水魚、而久哲之三男黒殿既為元久之猶子、

稱又三郎久照、造立屋形於鹿兒島、以令居之号北殿、

供奉來者山田式部・酒勾亦次郎・上井(神)甚五郎・山田弥

次郎等也、時人始也隱密疑之、終也歎々憎愬曰、北風

猛烈、以不可忍、是言蓋因呼北殿之稱號云爾者乎、漸

嗽々相誹之際、討肥後・石井・伊地知於下大隅、以降、

98 〔全〕

○(應永七)〔同七年〕庚辰、彼(此)只有荒説、凶徒蜂起不可勝言、於

茲乎、本田信濃守忠親大息歎曰、先君氏久迄臨終之時

戒後來曰、元久陸山北殿、敢勿間隔、今也變其遺言、

相為冰炭、故送簾中於山北、久照亦退出於鹿兒島焉、

由是忠親致當職、而出奔也、

99の1 〔田代清久譜中〕

○應永六年十一月、前此 公乞 久哲公第三子為猶子、

稱又三郎久照、居於麩島、謂之北殿、既而國中騷乱、

乃討肥後・石井等於下大隅、於是清久兄弟獻 公誓表、
乃晦日、公賜誓書報之也、記左、

99の2 〔正文在田代氏〕

今度肥後・石井就沙汰之事、面と事をも荒説を聞、身

の信用候様ニきかれ候之由承候、其上兄弟不殘敵方同

心之由聞得候、雖然代と忠と申、身大綱(候)之時分、親類

にひかれ被捨候はんする事、よも候ハしと存候、しよ

せん今時節、平憑存候、重て被致忠節候者悦存候、仍

兄弟親類のこらす敵方雖同心候、一身之事者、無他事

之由承候、日比志も露候かと悦存候、於向後もいか様

荒説き、候共、不可信用候、又今度振舞をも遺恨不可

存候、此條偽申候者、正八幡大菩薩 諏訪上下大明

神御討可蒙候、恐と謹言、

(應永六年)
霜月卅日 元久(花押)

田代殿

(本文書ハ、旧記雜錄前編二六三〇号文書ト同 文書ナルベシ)

100 〔伊地知周防守季豊譜中〕

○六年己卯、公立生黒丸久哲君之第三子、林又三郎、世謂之北殿、為世子、乃

名久照、久照君之立世子也、國人多不服之、十二月、

蓋君討伊地知及肥後・石井蓋三氏時方為国老、按福昌寺募緣簿、有石井元義、肥後豐盛者、

疑於下大隅、蓋以不服故也、據明年國中愈擾、久照遂去、八年三月本田忠親奉久照叛

公、自櫛間為寇於志布志等事、則此討三氏亦知當久照黨、故書以俟來哲、

101 『應永記』

○同七年庚辰ノ年ヨリハ唯如為破蜂巢、本田信濃守故氏

久ノ御遺言故、雖被歎申、彌嚮執成重、御臺ヲ歸山北

玉フ、久照覺島退出ト云云、雖有次第也、信濃守失面

目、捨本職令上洛畢云々、

〔○此年十二月十三日、伊久入道久哲授入来院彈正少弼重頼書、

賜谷山郡給黎院半分為料所〕

102 『正文在官庫乎』

○上総入道久哲与確執事上聞、太以不可然、所詮互閣所

存、先令和睦、可被仰上裁之状如件、

應永七年七月九日

右兵衛佐〔満頼也〕

嶋津陸奥守殿（元久）

〔本文書ハ、旧記雜錄前編二六五八号文書ト同一文書ナルベシ〕

103 『應永記』

○同八年辛巳、元久卒大勢、四月廿三日ニ市来ニ押寄、

鎮守ノ山ニ陣取玉フ、總州即時ニ有御越山、筑前守忠

家内々意趣ヲ直山新左エ門・有河彈正入道ヲ以酒勾方

ニ被申、其謂者、敵方ハ惣陣カ尾ニ可被乘之由申候、

左候者、當城近ク引寄可為安否之處ニ、無指銘キモ候、

霧田之御陳錯乱タルカト覺候、是非祢答院ニ有御越、

大村方ニ可被力副叟肝要ニ候、左様ニ候者、太郎家親

御供可致存候ト也、有總州御悅喜、筑州中村ノ左京亮・

田口ノ左近將監召具シ而、於于總州ノ御宿ニ有談合、

廳而鶴田ニ有御越、彼城ヲ被取卷、元久ハ以大勢後卷

有、相隨人々者諸（誰）々々、高城・伊集院・谷山・覺島・

祢占・肝付・佐多・大始良・北郷・樺山・新納・梅北・

財部・税所・廻・玉利・加治木・平山・餅田・平松・

中津野・平瀬・吉田・蒲生・和田・高木・眞幸・馬越・

平良・曾木・栗野何茂有奔走、其勢三千五百騎、九月

五日、熊越ヲ打上而大陣ヲ被取、依之御方陳成^シ、^{シトロイ}總州ハ諏防ノ坊近キ処ニ有御座、嫡子守久・二男忠朝モ其勢貳百計河ヲ打渡リ、萩ノ平ヲ打通リ、岩腋ノ陳ヲ打過、熊越ノ陳ノ下ニ^ツ潛入テ取陣玉フ、敵御方見之、無不喪人者、去程ニ同十日、熊越勢二千騎計差下テ鶴田ノ古城ニ被乘臬ル、同廿日ニ古城ノ勢千餘騎程ニテ河ヲ渡、^{トビ}鵜巢ノ陳ヲ被取、御方ノ通路ハ可為難儀トテ、相良讚岐守自頼萩平陳過テ、其勢二百計拔連テ河ヲ打渡、鵜巢陳之戌亥ニ鶴翅形ノ陣ヲ取、亦次日廿一日、古城ノ勢ハ五百計ニテ神崎山ニ取上陳ヲ取、大村羽州總州ニ被申臬ルハ、敵方ハ巧了見ヲ仕候、今夜熊越勢敵城ニ入候而丸尾カ城ヲ取下リ、善福寺ニ陳取、神崎山ニ取合候者、惣陳切通路、三ヶ国ノ安否ヲ可仕候カト存候、是非ヲ有御計、善福寺ヲ可被召、總州尤可然、入来・東郷有御憑之由被仰臬利、先畏ト被申、中ニモ副田淡路守總州ニ被申者、重頼依當病被歸在所ニ候、此左右雖可申遺候明日ニ可蔓延、誠ニ御大綱ニ見得候、非可辞退、此在所ニ可取乗候ト被申、御晦玉^{梅方}リ、總州ハ庭ニ下合給フ、禮義誠深シ、大将ノ法ト見得タリ、

104 全

両手甲百四五十ニ而善福寺ニ被取乘、其勢從諸陳茂見物ス、淡路守^{軍脱心}黒綴腹卷ニ紅ノ鉢卷ニテ大長刀^{ヤウハツ}鞘弛被持、^{アツル}哀器量哉トソ被喪美臬ル、昔之王霸呼池渡堅漢土ヲ如助、左程ニ御方無勢之由求麻ヨリ被仰、實長急速ニ可出陳候、其程楚忽ニ御合戦不可然候由被申遺、

○同十月中旬ニ實長牛屎ヲ有同道被着陳、馬上三百騎ト

云々、自紫尾山^{スケ}簾迫ノ古陳ニ被支、敵御方見物之ヲ、然ニ敵城ノ通路モ不切、鏡山石・熊越者開合セタレ共、後卷之勢共モ勸忍難叶哉有ケン、安否合戦ト見得テ、敵方之陳々ノ勢ハ三手ニ作懸計利、十月廿五日酉ノ始ニ、千町田間ニ待請ケ、日入迄之切合也、両方大勢討死、手負不知数、去共敵方道ノ口ヲ有所望開城、鶴田方ト打連絡フ、元久菱刈ニ引退玉ヒ、合戦者可依其在所亘成者、大勢茂不叶ト申臬ル、

105 惣翁公御譜中

○渋谷四ヶ所之鶴田某、畔於久哲歸心於元久、其陰謀既

露頭矣乎、久哲使大村・清色・柏原・東郷・高城等、向其地構陳柵於萩原、屢攻鶴田也、元久不忍鶴田之聞急難、而應永八年辛巳九月五日、率麗島・谷山・伊集院・禰占・佐多・肝付・大始良・新納・北郷・樺山・梅北・財部・税所・廻・玉利・加治木・平山・餅田・平松・中津野・平瀬・吉田・蒲生・和田・高木・眞幸・栗野・馬越・平良・曾木之兵、共三千五百騎到、其地、先構陣於熊越、而後構陣於鶴田古城・鷲巢・神崎山諸所、日々發輕銳之士、相挑飛羽箭、侮大敵互死者多矣、被傷者不可勝記也、他日新納八郎三郎久顯越後守實久之二男、候于元久之本營、葎于退出之期、敵兵發出、久顯直為前矛馳對之、已為合戰太刀初之地、而久顯之從兵中野四郎九郎已下數輩戰死、伊集院兵部太輔亦遂戰死也、久哲軍中亦渋谷下村某已下數〔實久〕斬獲矣、今日敵兵者攻寄〔神〕崎本營外牆之際、味方者攻入久哲陣之牆内、自他雜乱未分勝敗、任天命盡筋力挑戰、果元久方勝利也、雖然遠越山路援兵少糧鹽亦不饒、且復鶴田狹小一所士卒不多也、我之軍中募軍功企訴訟、當日軍務輕薄怠慢、旁以無如之何、於茲豫將行祿賜、谷山郡内山田村三十

町者、雖為山田殿名字之地、強借之以畀吉田某、以和田村三十町畀蒲生某、由是兩輩廻和諧之計策、附屬鶴田城於久哲、鶴田某遁菱刈、而後元久亦歸陣也、其後畀谷山中村之内六町、與佐屋脇之内今〔網浦〕於山田某、是又名子之地所望返地也、

106 一全

○本田信濃守忠親憎久哲與元久有違隔、既以出奔焉、元久鶴田在陣之際、久哲三男又三郎久照号北殿、称之於大將、催士卒為國敵、已自櫛間至志布志、攻入于向川原之下宝滿寺、時新納越後守實久發出于犬馬場、對于敵兵、〔先〕隔川流飛羽箭、後渡川流及合戰、互戰死被傷其數多矣云々、

107 一聖業日記

○元久時代、薩州鶴田ニ御下取向候時、御内本田忠親元久を恨申、上総介殿三男北殿取立申すとして御敵仕、櫛間より志布志ニ寄、〔應永八年ノコト也〕向江河原ニ陳取寶滿寺迄勢遣候〔志布志領主新納〕實久〔實久〕處、越後守殿犬之馬場ニ向合、河越ニ先矢合有、川を

渡太刀打ニ及而、野邊之手ニ懸給、兄弟其外討死、

○四ヶ所、鶴田方奥州ニ心を寄候而、清色・柏原・車内・

高城寄合於度ニ勢を仕、既ニ難儀を請ル、御番衆ニ勢

を雖被遣、総州未存生之事なれば御越陣をとらる、於

此時元久被馳越、一陣を取給得者、差合之敵も陣取、

総州方ノ惣陣ハ萩の平と云所也、奥州より之惣陣ハか

ん崎と云所也、両方大勢なれハ日々ニ野州出合、矢を

射違事無隙、此時新納八郎三郎殿惣陣ニ御參被帰処ニ、

野州を懸候ニ依而早太刀打ニ及んず、其時ニ成而談合

する事もなく、両陣共ニ下合太刀打シ、太刀始之所ニ

而新納手ニ中野四郎九郎打死ス、一家ニハ伊集院太輔

殿打死有、総州方ニハ渋谷下村方前として數十人討る、

敵ハかん崎の惣陳外垣之涯ニ切入、味方ハ総州陣之垣

より内迄切入、敵味方勝負見分ぬ程之合戦也、され共

元久方ハ切勝、面ハ負ニなれ共、四ヶ所地下と云大野

臥多し、既ニ求广・和泉・牛屎・菱刈ニつ、けハ大勢

也、鶴田御方なれ共一人也、爰ニ味方ノ中ニ物言有ニ

依、奥州御難儀ニ可成様たり、所詮所領沙汰せは如何

と而、御料所之内、谷山之内山田殿名字之地なれ共御

借候程ニ、於及大事ハ任上意進上申す、無心ニ思召候

而、中村之内六町ニさへ之わき之内今網と申浦を御添、

是も故有在所と而下預被申、去程に山田三十町ハ鶴田

方ニ被遣、和田三十町ハ蒲生方ニ被給、依是儀ニなり、

鶴田方之事ハ総州へ付被申、元久ノ御代ニハ大合戦是

也、無為ニ成、山より此方へハ引退處也、

○薩摩國之内日置庄之内名主職事、所申預之也、仍状如

件、

應永八年八月十日 久哲(花押)

伊作大隅守殿

(本文書ハ「旧記雜録前編」二六七六・六八〇号文書ト同一文書ナルベシ)

○薩摩國之内南郷事焉

右、為祈所々申預置也、任先例、可致沙汰之状如件、

應永八年八月廿一日 久哲（花押）

伊作大隅守殿

〔本文書ハ「旧記雜錄前編二」六七七号文書ト同一文書ナルベシ〕

111 〔全〕

○薩摩國於知覽見院、自元久方之号祈所、先日知行分之

水田貳拾町事、右、為祈所可有知行之状、仍如件、

應永八年十一月十六日 久哲（花押）

伊作大隅守殿

〔本文書ハ「旧記雜錄前編二」六八一号文書ト同一文書ナルベシ〕

112 〔写在藤野氏〕

○鎮西邊賊船等、連々令渡唐、以便宜在所及狼藉云々、

太招罪科歟、於風聞之輩者、不廻時日差遣軍勢、可加

治罰、況到現形之族哉、彼是嚴蜜可致其沙汰、更不可

有緩怠之状如件、

應永九年八月十六日

〔足利義滿
在判〕

嶋津上総入道殿

〔本文書ハ「旧記雜錄前編二」六八九号文書ト同一文書ナルベシ〕

〔十年癸未十二月七日、守久賜入来院彈正少弼重頼西方・荒川・

羽島、共薩
州〕

113 〔全〕

○薩摩國加世田別符之内大浦村事、任先例、知行不可有

相違之状如件、

應永十一年卯月五日 久哲（花押）

伊作大隅守殿

〔本文書ハ「旧記雜錄前編二」七三三号文書ト同一文書ナルベシ〕

114 〔元久譜〕
〔應永記〕

○右大将義滿將軍家薩隅日三州中欲止鬪乱、命鎮西探題

曰、宜下上使成和諧焉、由是使朝山出雲守師綱・同小

次郎重綱、經豊後州向日向州、于時豊後太守大友修理

大夫親世、亦令吉弘土佐入道隨上使到當地、元久遂對

面於志布志、且賜奉書、記左方矣、

115 〔写有之〕〔畠山左エ門尉殿〕

為一名字、不断及合戰云云、何程之事哉、不可然、所

117 〔聖榮日記〕

也、仍執達如件、〔足利義滿〕「〔御判有〕」
 應永十一年六月廿九日
 嶋津陸奥守殿〔元久〕
〔本文書ハ、「旧記雜錄前編二」七二七号文書ト同一文書ナルベシ〕
 右之奉書、〔元久〕・〔伊久〕・總州稱兩島津、為鶴執之時也、彼上
 使者無隱名人、殊盡歌道之奧義、故連歌之達者也、若
 無一興者〔可〕司為無念、是以於大慈寺有和漢之會、先於元
 久之館對面之時、三獻云々略ス、志布志事終、而後將
 告上意於嶋津上総介伊久法師久哲、令赴薩州之路、過
 加治木、構棧敷於黒川、加治木高山某請待上使、催連
 歌之一興云々、而後朝山殿至于薩州、告上旨於久哲、
 其後自薩州解纜而帰洛也、爰朝山小二郎重綱者、候探
 題之館為逗留、相加于短尺一揆、於筑後溝中遂戰死矣、
 其後有不思議之奇異、故於市之塚造立小社崇之、號天
 神之末社云々、

118 〔薩野氏文書ノ内〕

○元久之御代、義滿將軍御代朝山出雲守師綱・同小次郎
 重綱為上使下向、豊後傳なれハ大友親類吉弘殿と而同
 下候而、元久志布志ニおひて御對面奔走有り、其時御
 教書に、「御教書前ニアリ、略ス」
 此御教書ハ兩嶋津と有シ時之事也、総州之代也、師綱
 は天下ニ隠れぬ名仁也、殊哥道連歌達者と云、遠國と
 而其會尺不足ニ依ハ如何と而、志布志大慈寺ニ而和漢
 有ける由承傳候也、「御馳走ノ獻立アリ、略ス」
 夫より薩广上総介殿へ被參候、路次之間も加治木黒川
 に棧敷打、加治木高山方連哥、其外之興共被求ける由
 承候、薩广より上洛有、此朝山小二郎重綱ハ探題ニ逗
 留シ而、たんしやく一揆ニましハリ、筑後ノみそ口合
 戦ニ打死ス云々、
 ○薩摩國知行分所之事、去年九月以来嶋津陸奥守押妨云
 々、甚不可然、早止其妨、為亡父久哲遺跡、惣領嶋津
 判官入道徳佛領掌不可有相違之状如件、
〔守久ノコト〕
〔案文ト見ヘテ名宛ナシ〕「應永九年カ」

〔本文書ハ「旧記雜録前編二」六九七号文書ト同一文書ナルベシ〕

119 〔二〕

○嶋津判官入道徳佛申薩摩國知行所之事、去年九月以來

押妨云々、就申旨被下 御判了、早止其妨、如元避渡

下地於徳佛、向後令和陸之由所被仰下也、仍執達如件、

嶋津陸奥守殿

〔本文書ハ「旧記雜録前編二」六九八号文書ト同一文書ナルベシ〕

120 〔聖業日記〕

○廳而薩州は元より四ヶ所破ける後ニ、総州方山籠し、

御方之判官殿・山城守殿・北殿・野頸殿、親類宗との

人々薩州郡ニ取入、判官殿ハ山門郡、隈之城ニハ山城

守殿居住候而碓山・荒川・羽嶋、薩州郡之内は不殘総

州方之手ニ属す、爰久世は南方ニ馳越、河野邊之城ハ

伊集院殿被持候ニ談合有而、則入部候而、次ニ顯桂・

知覽・山田・別府・阿多・田布施・伊作・伊集院・市

来・四ヶ所・山北方取つ、き早、

121 〔聖業日記〕

○田布施二階堂ハ伊作殿姉守ニて候、別府ハ二階堂方之

聲ニて候程ニ伊作ニ無合力、左様之事を内々久義遺恨

ニ思、元久ニ催促被仰、総州方并市来つ、き也、総州

二男山城守殿ハ二階堂聲ニて候、奥州も以後之事を思

召合、田布施ニ一陣召取卷、阿多・別府ニ雖合力す、

年内より被卷、明ル二月之始落居有、二階堂如市来落

候早、夫より元久御新所として、五代木方娘彼在所江

志布志より移置、其外宗との人々城衆ニ成置、折々ニ

付而元久も自鹿兒嶋御入候、此御臺之腹ノ御料人ニ久

義之子息を取合、以後ニハ伊作勝久ニ田布施をも御遣

候由承候、勝久之御新人之腹之御子、今相模守殿・遠

江守殿忠國ノ御子二人御座候、左有ニ依而、川野邊も

弥物よハくなる事ハ、鹿兒をハ伊集院方より被持候、

變爲助、故使土卒爲警衛、爰伊集院某襲至、而警固勇士悉以屠殺、於

坊津・泊津兩津ハ川野邊内たるニ依、総州より覺悟ニ

て候、御内之人々被差置候處を伊集院押寄、警固人を

討、如此候玉へハ無情次第也、方々取合、総州より河

野邊之城共ニ奥州へ渡御申、我ハ薩州郡へ御移候、左

候へハ、播州守殿ハ如山門移候ける由承傳候、久哲終

ニ川内平左之城ニ而死去候早、〔左様ニ成行ニ依而、別府之鮫島ハ御内之者之如して致奉公云々、〕
島氏亦滅黨徒之勢、降元久厲旗下云々〔忍翁公御譜中、別府氏与鮫島氏亦滅黨徒之勢、降元久厲旗下云々〕

122 〔野田山内寺文書〕

○ 任此状、可領掌之状如〔件脱カ〕

島津判官入道沙弥得佛御判〔守久也〕

薩州山門院山内寺社院主職田島等之事

四至

東限馬場大道 南限新御堂堀

西限田濠堀大道 北限陳之内堀東殿堀〔在堀宛也〕

右、件寺社田島者、自先祖師匠祐範重代相傳之所領也、

然者子息最珍坊依為器量之仁、限永代讓与早、到子々

孫々迄、無相違可知行也、仍為後日状如件、

應永十三年丙戌六月廿八日

〔本文書ハ「旧記雜録前編二」七四六・七四七号文書ト同一文書ナルベシ〕

123 〔應永記〕

○ 同十三年丙戌、田布施城ヲ没落畢、同十四年丁亥五月

四日、総州御年六十二シテ逝去玉フ、〔山城守忠朝ノコト〕
雍州平佐城ヲ請取給、而雖被踏得元久大勢山ヲ越サセ給間、不及敵對、
忠朝モ没落畢、

124 〔忍翁公御譜中〕

○ 上総介伊久法師久哲應永十四年丁亥五月四日死去之後、

二男山城守忠朝居于薩摩州平佐城、為守護之仇、何可

不退乎、率軍衆向其地陥平佐城、于時碓山兵部〔太輔〕

長野備前守・勝部撰津介・市来又左エ門尉・中間五郎

九郎・石塚讚岐守已下數輩斬獲者也、

125 〔冠嶽文書〕

○ 敬白

奉寄進冠嶽山三所權現限永代薩戸郡内天辰谷〔參段豆〕

右、寄進志趣、偏只為天長地久御願圓滿、且為家、

且為當代弓箭、且為子々孫々、或郷内安穩、或諸人

快樂、為取分息災延命、恒受安全、朝夕之祈禱奉憑

故也、依志趣〔如〕若件、

應永十二天〔ひ〕の二月九日

鳥津山城守恭原忠朝在判
〔伊久公の御二男相馬山城守也〕
〔本文書ハ「旧記雜錄前編」二七六〇号文書ト同一文書ナルベシ〕

126 冠嶽文書

○敬白

冠嶽山三所こんけん〔註〕りうくわんの事

右、こんとの世上目出度候て、弓箭のうんをひらき候
〔て〕〔註〕よせ田しほ入の本〔意を〕の事かへし申へく候、

かさねて一所寄進申へく候、せいくの御きたうをい
たされ候へく候、仍くわん書如斯、

應永十二ひのとのの八月廿一日

嶋津山城守恭原忠朝在判
〔藤〕

〔本文書ハ「旧記雜錄前編」二七六四・七六九号文書ト同一文書ナルベシ〕

127 注進案

○當國薩摩郡馳向平佐城、致合戦候之處、凶徒敗北之間、
〔山城守忠朝居城ナラン〕

攻落彼城候早、依遠國往反經日数候、言上遅引非緩怠
之儀候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

應永十五年十月十一日
〔比志島〕河内守義勝〔花押〕

進上 御奉行所

〔本文書ハ「旧記雜錄前編」二七七八号文書ト同一文書ナルベシ〕

128 感應寺文書

○河邊當所間寺領事、或書札惣抄五通云々、

應永十八年二月十五日 上総守久世判

〔本文書ハ「旧記雜錄前編」二八三号文書ト同一文書ナルベシ〕

「十八年九月十八日上總介久世契約狀二階堂山城守忠持に給
之、此日、久世入来院彈正少弼重長に莫祿院ヲ賜之」
〔ママ〕

129 元久公御譜中

○元久在洛之間、渋谷四ヶ所面々以清敷畔矣、應永十八

年辛卯、率軍衆到其地、構陣營於銚之尾、又島津上總
介久世及伯父山城守忠朝共與渋谷在碓山城、元久在銚

尾陣之際、忽繫病痾掃寔島矣、雖然、催山西・大隅・

南方之兵三千余騎、向于山北、而構陣於稻荷原・浮橋・
樋縁川之堺、于時敵兵為宮里通路入守中郷之壘、因茲

諸陣往還不得容易、於茲乎、北郷某為將師率精兵五百
〔印〕

人、構陳備於諏方松山、屢発野伏於瀬野原、又市来・伊集院之兵五百人許屯松瀬口云々、「已下應永記ニアリ」

130 應永記

○同十八年辛卯、久世伯父忠朝為先洪谷成一味、郡内ニ乱入被構碓山、去程ニ山西・南方・大隅ヲ靡ケレハ、三千余騎山ヲ越、稻荷原・浮橋・樋縁河之堺ニ陣ヲ取ル、御方ノ巧ハ、宮里ノ通路中郷ノ要害ニ打入テ、北郷殿ヲ為大将、諏方ノ松山ニ甲五百陣ヲ取、而瀬野原ニ野伏ヲ出サル、市来・伊集院勢常ニ甲五百計ニテ松瀬ノ口ニ澹、以平朶舟、江州ノ樋端之陣ニ通夏不可有子細、不然者先年萩嶺ノ如御陣ノ時、京泊ヲ燒拂、坊泊・別府・市来之大船廿艘来テ、朔日比之高鹽ニ楯前之邊、高江之河縁ニ漕寄テ可上、船ハ船艦艦舷ニ垣楯ヲ可搔、縦敵方ハ五拾騎卅騎雖懸矢射、七迫邊迄漕上リナハ不可有子細、小舟ハ五艘三艘モ組合テ白濱邊迄漕上リ漕下、樋縁之陣ニモ可通夏、只可如陸地、亦跡勢五百騎程鹿兒島ニ着候由相聞得稟李、其勢着者松瀬之浮勢稻荷原ニ打渡、寺山ノ際打通、陳ヲ取、野伏ヲ出

ル程ナラハ、樞崎勢ハ不可消、必碓定之處、鹿兒島ノ左右到来ス云々、

131 全一

○去程ニ久豊久世一ツニ成玉フノ由聞得ケレハ、頼久一人ニ成大綱ト、大村・入来・山北ヲ去テ伊集院ニ引退ル、去ル間水引両城ヲ自高城有所望、久世領状アリテ、従高城大勢ヲ被押向之間、彼城則時ニ為没落、勞敷哉、先忠ト云ヒ、守護町之外垣ニテ有物ヲ御心浅、久世此人々ヲ被失物哉、如今者當國ヲ可被治不定哉、加難破人多リケリ、〔應永十九年ノコトナルベシ〕去程ニ自鹿兒島匠作ノ御使ニ伊地知縫殿〔垂魯入道久安〕助碓山ニ被參、久世御悦喜不斜、被仰稟ルハ、依今一左右ニ可有越山候、其時者市来殿〔備後守宗親〕ヲ可憑存候ト被仰計李、洪谷ノ面々ニ被通テ令越山、串木野ニ御逗留有リ、重テ以本田安了ヲ久世ニ有談合、天辰了監寺其比ハ為執權ト、〔ウレヒク、シキ〕震敷問答と聞得シカ共、人ハ不知之、而久世・忠朝市来之宮園ニ御着アリ、匠作者平等寺ニ被召御陳、久世急キ桑波田寺寺腋ノ辺ニ可差寄給候、市来殿ヲ憑存通、匠作再三雖被仰通、久世難洪候間、平等寺ノ陳

ヲ引退ケル、匠作ノ御心底ハ怖候ト、此時ニ了監寺之計策顯タリ、家親大ニ被驚、覺島ニ被進使者、御陳ニ

遲參卓先失面目候、但山北ニモ有御談合、久世急ニ越

山候ヘト依被仰、領内ニ打懸給間、御一味ト存候ヒテ、

馬場讚岐守ヲ進候ヒテ、自今以後之身上、於貴方様恕

翁之御時ニ不可相替候由被申、匠作御悅喜相半也、此

氣色御覽玉ヒテ、久世者河邊ヲ請取玉フテ有御越、忠

朝者隈城ニ歸玉フトソ聞得云々、

132 「義天公御譜中」

○山北四ヶ所開陣之際、大夫判官守久・山城守忠朝・北

殿久照・野頸殿已下一族皆先入薩广郡、而守久入部于

山門院、忠朝居于隈城矣、薩广郡内永利・碓山・荒川・

羽鳥等之諸所屬渠之旗下、且復川邊為伊集院彈正少弼

頼久之領地、上総介久世請之定居城矣、故頼娃・知覽・

山田・別府・阿多・田布施・伊作・伊集院・市来等之

諸所又屬渠焉、久豊之旗下覺嶋・谷山・指宿・吉田・

蒲生・税所氏・本田氏・溝邊・田万理・敷祢・廻・和

田氏・高木氏・北郷氏・樺山氏・末吉・恒吉・市成・

山田氏・平房・宮里氏・百引・高岳・鹿屋・大垢良・
下大隅・財部等也、

133 「正本國分正八幡宮社司澤氏藏」

○奉寄附

正八幡宮

右、大隅國下西郷事、為當官造營料所、^{⑧所}奉寄進之状

如件、

應永十八年十二月三日

藤原久世（花押）

（本文書ハ「旧記雜錄前編」二八六〇号文書ト同一文書ナルベシ）

134 「写在藤野氏」

○ 契約

一三ヶ國如何様雖轉變候、成水魚思、不他語、捨身命用^{⑨テ}

可被立事、

一縱徳仏・雍州之所存雖如何様候、於于愚身者、諸事お

一味同心可申談事、

一自然和讒凶害仁、不慮之荒説申候時者、互以面可申披

事、

若此条々▽◎偽申候者△

日本國大小神祇、以殊八幡三所大菩薩 天滴自在在天
神 諏方上下大明神 稻荷五所大明神 春日四所大明
神御討お可蒙候、

應永十九年二月十二日

泰雄(花押)

久豊
嶋津殿

〔本文書ハ「旧記雑録前編」二八六八号文書ト同一文書ナルベシ〕

135 「申木野頂峯院文書」

○冠嶽權現御供田

薩摩國薩戸郡之内勝目迫老町如本返付申候、
右、件在所者、早守先例、可有領知、⑧⑨如件、

應永十九年二月廿八日

〔相馬山城守忠朝ノ法名〕
島津道世在判

〔本文書ハ「旧記雑録前編」二八七二号文書ト同一文書ナルベシ〕

136 「伊地知季豊譜中」

○十九年壬辰云々、

蓋比是歲、公及總州久世成乃使季豊與久世・忠朝及

市来家親稱備後守會于碓山、謀合師伐伊集院氏、既而

公帥師陣平等寺以俟三氏師、久世・忠朝及市来人至于

宮園、在市伊集院頼久乃發兵專當 公帥、公使人

急招三氏、三氏師不會平等寺、於是 公不利遂班師、

乃築川田・比志島・郡山等以備之、季豊復為之歟初、

137 「聖榮日記」

○内々河野邊久世ニ談合有条ハ、伊集院方國之望有、上

総介殿と奥州前々如約束、南方薩州郡山門御計候得、

元久如御計申談候而、伊集院霜臺頼久ニ矢一射度由被仰候、

尤と依有領掌、御屋形御手ニ属旁相催し、満江川田向

より伊集院平等寺ニ陣取處、前ニ相圖違而南方伊作川

野邊より日置南郷寄々勢ヲ不遣、既陣を取迄もなし、

伊集院城よりハ一方ニ平等寺之陣ニ懸、既千頭之勢

たり、陣も支へ候ハ、直難儀延ましと而談合有而、

則陣を御退候処、吉田・肝付ハ多年好なれば、跡勢し

つ拂ニ成、敵大勢なれば陣より矢を射違云々、

138 「義天公御譜中」

○久豊使伊地知縫殿助〔應永十九年ノコトナルヘシ〕往碓山、達和睦之事於久世、于時

市來備後守家親亦到于碓山、述和睦之悅、再使本田法師安了往碓山、達蜜事於久世曰、如古來久世自南方至

山門院施政事、久豊自覺島至大隅山西為下知、久世與

吾長如水魚相交、則誰敢有敵薩隅二州者乎、若容此言、

則爰伊集院彈正少弼賴久亂國家之企既露頭、與久世俱

欲退治賴久、與同是幸也、久世答曰、安了所傳各以為

然、久世何背此議乎、因茲撰吉日良辰、引率所屬久豊

之軍衆、自滿家川田向邊至平等寺構陣營、而久世・忠

朝到于市來之宮園、俟未發向、且差价使速〔可有發向

之邊可有發向、敢勿于桑波田寺脇之邊、勿敢〕猶豫、於家親亦同以此言矣、

雖然久世變前約不發一人、是以賴久率精兵殆一千騎許、

向平等寺一陣、飛羽箭競戰者甚以急也、若不去當陣好

戰經數日、則恐不得遁乎、見可而進知難而退師之常也、

與諸將俱議、而已帰陳則吉田某・肝付某殿、強敵乘勝

競至、吉田某返轡奮威吐詞屈敵、肝付某同會釋引退、

雖然銳兵弥至、於茲吉田〔勝〕從兵〔勝〕屋大藏還向、提

太刀切齒盡筋力散火挑戰、丁此之時伊集院之族吉俊某

被傷、由是合戰止、互相退矣、夜暗之帰路不用心緩々

然、爰郡山之庶卒等不計變心、求狹所潛群集、奪捕肩

荷諸物兵具乘馬、忽然退去矣、由是其後川田・比志嶋

已下之要害堅〔門壁〕、入守兵警衛敢不怠也、當此

時也、久世為得佳期入部于川邊、而忠朝帰于隈城矣、

市來備後守家親遣价使於覺島曰、今度障久世・忠朝之

變意、述所不着陣伊集院之非、且復期後來、以達可抽

忠功之厚旨者也、

139 〔應永記〕

○同廿二年乙未、河邊覺島ノ合躰仕給ヒ、匠作河邊ニ有

御越、久世ヲ被成御奔走候也、匠作躰テ歸院仕給テ、

為其禮久世ハ覺嶋ニ有御越也、月迫之事成レハ、可有

御帰處ニ、久世ヲ年内者可有御逗留、河邊之城ハ請取

可申也ト云々、其時久世之御心底於勞難申盡、侍中太

郎・本田伊賀守被仰聞者、河邊ノ城ノ開クレバトテ、

不可有命生亘、左有人ノ孫、去ル人ノ子也、左テハ一

ツ足ニ可思定、河邊之亘者犬太郎アレハ、伊集院・伊

作ヨリ不被見離者其迄也ト被仰而、匠作ニ御返亘ヲ切

畢、同廿三年丙申正月十三日、被召御腹候畢、御年卅

140 『義天公御譜中』

一、侍中太郎・本田伊賀守・天辰助次郎其外人々腹切畢、平等寺之陣引ノ時ニ、匠作息ヲ空ニ突玉フ、泪酌給シヲ語傳怖シク思シハ是也梟利ト、舌ヲ卷人多カリケリ、

○應永廿二年乙未、上總介久世與伊作四郎左エ門尉勝久擬評議定和睦、達其故於我、々亦應諾、由是勝久已來遂一面之參會、而後久豊先往川邊見久世、同年十二月、久世來于覺島、匪啻遂對面、備盛膳進旨酒、而後及將歸于川邊之期、相圍于手堂坊鹿兒旅館、差价使曰、數年鬱憤無所欲止、去川邊居城則可有死解圍、如不然者令不得去旅館乎云々、久世聞此言、熟以為、縱使雖去居城豈得保身命乎、速可自殺、於茲乎、福昌寺大田和尚入久世之旅館、證古今之例諫曰、或去領地以為和融、或去居城以屈同僚之旗下、自古昔至當今、依時之運、所以勇士之不能無也、以去居城何為公之耻辱乎、保生全身宜俟後來之時不止、不得已而將差价使於川邊、問件義理、而差本田伊賀守、伊賀守報曰、吾今片時不可

久世之去膝下不可、故使小田原彈正・柳田大膳達川邊、犬太郎丸二三歲之兒童、未分黑白、執事天辰玄徳庵息男阿波介已下家臣等群聚評議矣、長門守亦自知覽至川邊同議定返言、而翌年正月、小田原彈正到于覺島曰、犬太郎殿雖為幼稚、⑨雅群臣等無二心抽忠節、為居城之警衛、可運長久之計、久世之生死可有自身了簡、蓋去居城有身命之謀、對他家則可也、於同家則非瑕瑾乎、柳田直留川邊矣、久世聞返事嘆曰、和尚教言強不止、依⑩言難辭退徒逾年、雖悔無益、于時應永廿三年丙申正月十三日、自殺于手堂坊矣、年三十一也、殉死者侍中太郎⑪一族・本田伊賀守・小田原彈正・天辰助二郎・黒田・伊駒・金田已下勇士共十一人、爰年來之中間賜末後之盃而戰死云々、久世匪啻為同族當家嫡流也、非楚忽之加誅、先是伊集院退治之變兼約、將使久豊至敗亡、其⑫敬憤何不敢乎、其後南方彌含憤、絕人馬之通融矣、誅戮嫡流非久豊之素意、是以剃髮而祇存忠也、

141 『聖業自記』

○先伊作・川野邊寄々談合候而、使者を以見參候、伊作

勝久ハ御屋形御對面候、総州久世ハ歳末ニ成鹿兒嶋ニ
參上候処、種々奔走候而被帰候時、年來之憤なれば、
其旨を被仰出候趣ハ、川野邊之城を給候ハ、御命を助
可申候、夫無承引候ハ、腹を切せ可申と而、變而御宿
千手堂坊を被取巻、久世より之御返事ニは、城を開、
腹を可切時ニ到而ハ、速ニ身上を可計と涼敷被仰切、
其時分福昌寺住持大傳御長老御座候而、久世ニ御教訓
ニハ、武士之城を開儀ハ世ニ有事情、可然ハ左も候而
御助肝要之由、類ニ依被仰、左候ハ、と而川野邊ニ此
左右を本田伊賀守ニ被仰、御意難背候得共、於我等一
時も御傍を離申間敷と依被申切、小田原彈正と柳田大
膳を川野邊へ越而、犬太郎殿江披露、二三之御歳なれ
ハ不及申、時之老名天辰けん庵(龍脱)、其子安房介、久世御
内ニ有程之人ハ押寄吳見有、知覺より長門守馳寄ても
同意有、若子御座候へハ取立可申候、夫之事ハ御思案
次第候、御住所を開けん事ハ家之疵あらすやと被申切、
不及申小田原彈正は鹿兒島ニ帰る、柳田ハ其俣、今之
世迄之物語ニ成ける、此左右聞得けれハ、久世さてこ
そ前より如申、一篇ニ腹を可切由御申つるとて、正月

十三日ニ腹を被召、御供之旁親類ニ者侍中太郎、御内
ニ者本田伊賀守・小田原彈正・天辰助二郎・黒田・伊
駒・金田其外殿原以上十一人、此時御年比之中間御盃
給打死仕候早、如此御沙汰ハ不慮之儀非ず、前より契
約御悔篇有し故とこそ聞傳候也、久豊惣領をケ様ニ計
申上候とて御落髮有、法名存忠と申、夫より南方本よ
りも通路切候早云々、

142 應永記

○同廿四年丁酉、河辺松尾之城ニ鹿兒島ノ勢ヲ引入タリ、
雖然内城者堀ヲ隔タリ、其上霜臺其勢三百計ニテ馳越、
松尾之城ヲ被取巻、亦阿久寢(根カ)・伊作之勢重ル間、彌成
大綱、自鹿兒島・谷山大勢山ヲ越シ、薙野原ニ陳取、
見之陳ト松尾之間ニ堀ヲ堀リ水ヲ湛、大木ヲ切懸タレ
バ、松尾之通路難通、城之入衆ハ既ニ飢死セントスル
間、思切テ薙野之勢ニ懸梟リ、霜臺・阿久寢方爰ヲ先
途ト戦計李、御親類ヲ始、國ノ人々百余人討死ス、都
合三百余人失ニ梟リ、残之人々ハ可助無方角モ、匠作
被聞召、犬太郎殿者幼少成間、霜臺之計ヲ以テ何ノ城

ヲモ開ヒテ面々ヲ可助、霜臺谷山・喜入両城ヲ被開者、無子細有ケレハ、少茂不夏延兩城ヲ被開、其時諸軍勢松尾之人衆共ニ被打歸臯リ、此人々於于鹿兒島各有談合者、抑今度不思儀成ル於在所ニ而國之傍數十人討死(奮脱之)ス、我等モ非可遁處ニ、避両城被助申条喜ヒノ上ノ耻也、軍旅進退ハ大将之法成レハ、輕ク城々ヲ去テ被助也、争不酬芳恩哉、左レハ非廉直剛直者可背大将ノ法、正理ハ廉直也、無欲ハ剛直也、兵書ニモ、如此命ヲ生キタリ顔ニテ在處ニ婦テモ腹心ノ可病、皆揃儀飲神水其頭々四十六人、其勢三千餘騎谷山ニ押寄テ、沼深田不嫌、蹴ケツ切岸馬ノ鼻ヲ突キ被貫、河口平河ハ何モ難所成レハ、不及後卷沙汰モ成、道口・給黎共ニ兩城被開タリ、是屋形之剛直徳也、

○犬太郎之臣有酒勾紀伊守者、守川邊松尾城、忽變心將逆戈、應永廿四年丁酉九月上旬密通存忠(久患)、招人師旅於松尾城、雖然内城野頸隔隍堅固也、于時長門守即日自知覽上木場馳至川邊、彌以構城警衛不怠、且復請援兵

於近邊、故別府・山田・阿多・田布施・伊作之騎步奔走到着、伊集院彈正少弼頼久亦率三百餘員馳以救來、構城甚堅矣、所以松尾却為籠城也、因茲鹿島・谷山及近方催未發之士庶、構陣於弦尾山口平川、而後地下之士卒等欲窺見於川邊之樣、使數輩人夫肩荷兵糧、相隨之赴山路將馳到、敵兵為警固通路者悉所以追散也、于時吉田・蒲生已下近方之騎步漸々馳到、欲踰山路到川邊、而敵兵衆多未得越山之際、本田・税所・栗野・菱刈・牛屎之軍衆到着、於茲乎、各進半途構一陣於山中、待天時與其變、丁此之時、北郷・樺山・新納・飢肥・櫛間・肝付・禰寢・平田・鹿屋等之騎步悉渡海來、故進川辺城邊、雖然未能松尾之為救、各擬群議進寄野頸、而只出步卒飛羽箭順時之宜、或進或退、未發實勢密在城裏似無人者、此際自松尾城使一价忍達陣中曰、松尾城中匪畜窮困、無兵糧絕水路、然而廻籌策唯補渴耳、聞此言則我之軍中有親子兄弟所緣者、己之存命之間、不忍見閨渠之難儀、發大息者太多矣、報件使曰、援松尾衆逾太山到當地、不得其險徒經數日乎、速決安否可為一戰、從何地向何地為得便宜之道哉、再俟一价忍到

矣、使者勞苦入松尾城、達伊地知對馬守・寄田帶刀長、其後又一价來曰、總門者已構小陣、相守堅固非所以及了簡、薙野原者廣遠也、自其地向敵城可乎、先發步卒侮敵城則渠亦可防禦、乘其進退之變、攻寄城下破却垣墉、俟挑戰之佳期、穿破松尾塞門、突出可較勝於一戰、雖然三日猶豫而後宜攻之云尔、因茲陣中為二分、其一分以樺山某為將師、其一分和泉殿兄弟・佐多伯耆守・山田^①某・伊地知・吉田・蒲生・栗野・菱刈・牛屎等陣薙野原矣、于時伊集院彈正少彌賴久下於野頸為內城岸於後、從川流掘二之長堀、湛水伐大木為其間之垣、以向之矣、九月十一日、我兵已進川緣、敵亦出墉外、隔川流飛羽箭以防禦也、我兵漸渡川進入敵兵於城裏、乘勝將越垣墉、先者雖落入堀中、不為救助、後者押倒垣墉、先者為垣下不得進、爭前攻入、然而敵兵更無防禦、其間在松尾之緣者步卒等少小入松尾、于時賴久開陣門、手干戈突出防戰移刻之際、味方軍敗上之一分中、新納近江守之臣隈江右京亮・上井筑前守・屋ヶ代四郎左エ門尉・平良等戰死矣、近江守持大長刀盡筋力相挑、于時切破冑鉢將向戰死、丁此^②之時安樂豊前守・川野土佐

守與後之敵相戰之際、^③條然見近江守之危急、切通目前之敵、携近江守退去味方軍中矣、爰平田右馬助重宗者一族勘解由左エ門尉・田鍋・津曲等遂戰死雖滅勢、切通敵軍中、得入松尾城矣、大寺某・長野左京亮被傷者深、而幸免死矣、田代肥前守・彌寢兄弟・同山本孫五郎及家臣數十人共戰死焉、同出羽守被深傷亦存生、蒲生美濃^④守入道遂戰死矣、其一族中原同所斬獲也、又下之一分中、和泉殿兄弟・給黎之猿渡已下十有餘員戰死、伊地知將監亦所^⑤斬獲也、吉田・和田・下田・西村之從軍數十人、栗野・菱刈等戰死矣、合戰之勝敗雖依時運與籌策可非、今度敗軍未知孰是孰非也、松尾城者所以從平田重宗之勇士一百許輩、相加前之人衆、無飢渴之可補者莫何之如矣、爰吉田若狹守者兄弟一族遂戰死、不勝哀傷、雖然謂伊集院彈正曰、戰場之勝敗未嘗有籌策之善與不善、而依時之運、故或脫冑降參、或請通路之免逃去、或約後來為和睦、素未有無其例、今也在松尾之士卒吾請開通路欲退去、宥之者於予乎何之幸之有乎、賴久答曰、匠作者犬太郎殿^⑥敵、於賴久者有宿意之未散、當此之時、何有一人之宥死者乎、吉田

144 聖榮自記

曰、先是在甕島原羅之陣、將向自殺之際、蒲生與予同意強以請太守、而救公之身命者今已忘却乎否、今度我之弟及一族家臣數輩遂戰死、唯予幸而不死、以發此言④免臆病之至乎如何、頼久曰、戰場勝敗已下之事、非吾未知、今度勝利所願之幸、思是所以天之與吾也、雖然公之先恩亦敢不可空、吾之所言無少違者④之可應其本④求、先甕島城、次谷山・給黎附與此三所、則使松尾之衆解圍無恙赴歸路、且復自今以後止起乱之企乎、吉田某告之於甕島、存忠即答曰、應頼久之言速可與谷山・給黎也、甕島諸軍帰陣之後可去昇、今度存忠匪啻④微羅、恙不得進發、一族他家數輩之勇士遂戰死、旁所以失面目也、速先昇兩地宜救窮困之士、若狹守達件旨於頼久、頼久曰、然則先可領谷山・給黎兩城、其間松尾之士卒可止出入、弥圍夫城、警衛者孔堅矣云々、

○川野邊事も隱蜜なれば更人不知、谷山・かこしま・下大隅之衆計ニ而、酒匂紀伊介持候河邊松尾之城引入、左候得ハ、内城野頭堅持こたへ候依、長門守上之木場

より不移時馳越、城之構近所之左右を被通候へハ、別府・山田・阿多・田布施・伊作之勢も馳寄、殊伊集院方奔走有れハ不及申、松尾之城入番衆敵之痛少もなし、鹿兒島より合戦可有、匠こそ詞を放、堀越ニ匍あへり、去程屋形絃尾山の口平川ニ御座候得共、御勢未寄、俄之忍之事なれば前より無御觸、急々免角了簡ニも不及、谷山・鹿兒島残る人々地下野卧先山ニ入、通路を持夫雜共兵糧を持城ニ可入を見て、敵ニ跡立切散され候へハ、川邊之左右も不聞得、先吉田・蒲生寄々之勢馳續山を可越も敵大勢なれば無力、跡勢を待候処、本田・栗野・菱刈・牛之山之衆馳来、其力ニ而山中ニ切寄て跡を待候処、坂より上北郷・樺山・新納・飢肥・櫛間・肝付・祢寢、御内平田・鹿屋方、此旁渡海被申、川邊之城見渡候処、山より打出御陣を取巻、依之御方城之便ニなる事なし、篠之城開、敵ニ寄合所ニ而可有合戦と而打立而、城之野頭之敵陣之間ニ押寄候へ共、野卧を出、勢ハ垣より内引籠居たり、切入ニ不及、城よりしても様々サマク方便ニ而人を出注進有、兵糧も尽き、暫之堪忍も難成、水之手も被取候、菟角之了簡ニ而水計の

ミテ、以之外御一大事とも可成と城内よりも被申、此左右を親八間、子八父、兄弟ゆかり迄是を聞、一篇ニ中々生而聞んよりハなと、佗言する人多し、城衆も弱り候得ハ、後巻として是迄来りてハ案否合戦候ハ而ハと而僉儀有、城之使何方より城ニ者可取入也、其左右聞てこそ合戦之方便も可有とて、彼使様と忍ひて城ニ入、伊地知對馬・寄瀬田帶刀〔分脱カ〕ニ此旨語、城戸ハ敵小陣を取持候間、更了簡ニ不及、なきの野原は廣ミなり、彼方より敵陣ニかゝり、野卧をかけ、絡やうを御覽候而垣をも取破候ハ、其時片〔岸カ〕をうかし堀、城戸より取合可申候、敵知てハ徒事候、此使ニ城戸の邊をハ御尋候へハ、今二三日は可被待候と注進有、去程ニ陣中談合有而勢を二手ニ分、なき野原江椀山川渡して、陣取衆は一家ニ者和泉殿・佐多伯耆守殿・山田方、御内ニ者伊集院方、其外御内之人々、國方ニ者吉田・蒲生・栗野・菱刈・牛屎此衆ニ而陣を取、敵方伊集院之手ハ野頸陣より馳下而内城之岸を後ニ當陣を取、川俣下りニ堀ニ堀水をた、へ、其あハひ垣を結構候處、御方より先野卧川を隔、敵も垣を後ニ當向合矢を射違候へ

ハ、城ニ心を懸衆、川を渡前之野卧を追籠、其俣墻ニ付、敵之野卧ハ陣之内ニ引入ハ垣を越る者も有、取破ラんとする者も有り、前ニ越る者は堀底ニ落入は、跡之衆垣押たをし候へハ、前之者垣之下ニ成而不延立、夫よりして乗越踏越切入、其時迄も敵妨る事も、城ニ籠たる人之内之者、左様成方より輕としき者を少々通可然、旁武者ハ跡立而垣之内ニ切入候處を、伊集院彈正之陣城戸開、静ニ出合、太刀打ニなれハ、天命とハ云ながら無手切負、宗との御方被討早、上手ニハ新納〔應永廿四年九月十一日ノコト也〕近江守殿手〔平良カ〕ニ隈江右京亮・上井筑前・八ヶ代四郎左衛門・平郎打死ス、江州ハ甲之はちを切ひしかれ、大長刀を以手之程尽合戦有、傍安樂豊前・川野土佐兩人前之敵之中を切通、江州を取退、此時平田重宗ハ親類ニ勸解由左衛門・田鍋・津曲なんと被討、我は城ニ切通、大寺美濃守・長野左京亮深手負、様々助、田代肥前守〔久助〕ハ打死、國方ニ者祢寢兄弟・同山元孫五郎其外宗との者共數十人被討、同出羽守深手負助る、蒲生美濃入道〔清寛〕打死ス、親類ニ中原被討、是聞ノくなれハさのミ不及〔又四郎直久・又五郎忠次〕註候、下之手ニ者一家ニ和泉との兄弟・給黎狼渡其外

一所ニ而十人計打死ス、是も御内伊地知將監被討、國方ニ者吉田・和田・下田・西村、此手内之者數十人、栗野・菱刈打死す、武士之覚悟之前とハ云ながら、両手ケ様ニ切負事天命也、左候へハ、陣もそ、ろき主人被討内者其俣帰る、堀内ニ者平田重宗ニ付入衆百計も有らん、本之衆取合中ニ不及申式也、然者弥犬太郎殿敵又ハ於私も本意此上可有かと而、是偏奥州ニ向て之意趣たりと被仰、又吉田方より彈正へ申遣様先年於鹿兒島腹可被召處、蒲生入道と談合仕御命を助候事御忘候哉、弓箭之習とハ乍申、我々か舍弟親類討被申候、未練之至候かと注進有、彈正も尤有事候、但是より申所承引候ハ、談合可申候、左も候ハ、急々可承由吉田被申候得ハ、鹿兒島之城本望ニて候、可給候谷山・給黎渡給候ハ、一家國ニ霍執を存ニても無之と被申遣、此由鹿兒島江注進有、屋形よりは又可然候、今度心地煩ニ依て無出陣候、一家國方打死候、存忠か所更無面目次第候、急々相計道行候する事肝要之由候、被仰出候、其左右伊集院殿へ注進候處、馳而先谷山城・給黎可被受取候、其間何方も城内之出入有間敷候而、

外野卧をふせ被取卷、平田重宗城之内ニ被居候、伊作ニも平田民部・同伊勢方候得者、堀越ニ物語なんとして狂言ニなぞらへ、餅をつふてニ打て、飢たる下之者ハ是をとる、重宗見苦敷と而制有り、伊集院よりも菟角と候得、于今ハ其儀有間敷子細と而、親類より八日簞など遣酒を添、ゆかりの所より酒茶之子迄も取入、是重宗一人之志ニ依人を助る、伊集院南方之手を以谷山・給黎城請取候、同平田重宗城之内衆列ニ而先陣ニ移候早、谷山・給黎両所を被受取候へハ、鹿兒島之事ハ此陣衆帰候而渡可申候、餘々此間苦勞ニ候と吉田被申、陣を開引退、鹿兒島へ参上有而皆々懸御目、祝言不及申候云々、

145 「伊地知季豊譜中」

○二十四年丁酉八月、島津久林之臣酒匂紀伊守以松尾城邊陰歸于公、公乃遣伊地知對馬重利無名、按譜書之、島山重道曾孫、寄瀬田帶刀等、帥下大隅・谷山・鹿兒島之衆百五十許、入松尾城援酒匂氏以威久林、於是久林年五歳、在于内城、亦在川邊、執事天辰見菴等堅以城守乞援於諸邑、二十

日、伊集院頼久及其族今給黎久俊等來救之、直圍松尾

城、城中却困、公時次于平川待徵諸軍、當季書曰、伊

當季書及弟重
眞・重春等屬

等從、乃進陳野頸、城兵間出告急于陣、

聞者愁痛直將救擊、且令使返謀之、重利等因示地利、

於是二十七日、公分部親將軍向內城、別使季豊等同

和泉直久稱又
四郎

・佐多親久等、陣于雜野、九月十一日、

及頼久軍大戰於城外、我師敗績、死者三百餘人、家弟

重春等死之、吉田清正見、乃說頼久成于公、公昇

之谷山・給黎等、於是頼久解圍、我師皆還而咸相謂曰、

於是役也上下昆弟無不遭喪、其能免者亦棄二城而一命

保、孰不耻之、願為死者釋怨頼久以報君恩、乃請命于

公、公遂許之、乃親帥師又攻谷山城、重利等為之先

鋒、頼久力困請成而降、於是未二旬、公乃復谷山・

給黎二城、及取石谷雪松尾之耻也、

146 〔野田山内寺文書〕

▽ ② 寄進狀 △

○ 薩摩國山門院之内井貝居田七段、新御堂イナシ、苦苔崎八幡

所奉寄進也、仍狀如件、

應永廿五年十一月廿八日

〔播守守入ノ法号〕
沙弥得佛〔花押〕

〔本文書ハ「旧記雜錄前編」二九七号文書ト同一文書ナルベシ〕

147 〔應永記〕

○ 同廿五年戊戌、忠朝雍州不儀有振舞、自市來被成遺恨、

縱ハ依山田・羽鳥亘也、入來ニ有談合、同十二月、大

石ガ平陳ヲ取、明廿六年己亥正月十一日、差寄テ山田

ニ陣ヲ取、渋谷一族一ニ丸勢雖無不足、佐多讚岐守殿

ヲ大将ニシテ被差副角難道行間、同八月廿九日ニ匠作

山田ニ有御越、廻ニ陳取被責之間、雍州成道ノ口去城、

隈城ニ被楯籠、此ニ有不思議、去ル六月廿一日申ノ

對計ニ東ヨリ白雪埋山降來、後ニ聞得來ルハ自山門神

奉ヲ都ニ被振下、其靈驗之雪トゾ申ケル云々、

148 〔義天公御譜中〕

○ 薩摩郡山田永利城上総山城守忠朝所守之地也、市來某

有宿意之未散、而與渋谷一族俱謀、應永廿五年戊戌十

二月、構陣於大石之平、翌年己巳亥正月十一日、進山田

構一陣、洪谷一族為一列進向、已及合戰、忽洪谷之軍敗、清色彈正忠之兵數十人被斬獲矣、於茲乎、洪谷等請援兵於存忠、執事等聞之曰、以私之宿意起亂於國中、不俟守護之命、而既及合戰、敗北之今請救於守護、專血氣之小勇、亡上下之禮義、敢不能救所以延引也、彈正忠又請曰、自今以後屈守護之旗下、抽無二之忠節、退治凶徒、令國家婦太平、先得當日之救所以屠殺對敵欲安我之疆內、於茲不得已而許諾、群臣等僉云、〔勿敢〕救、氏久・元久二君應渠等之請、踰山路勞軍務、無勝利有難儀、今度之勝敗未知如之何乎、雖然存忠豈無慮乎、総州一類者古敵又今敵、遂不可不退治、當此之時洪谷一族無異意從旗下、則無可疑者、而蓋容易乎、先使佐多讚岐守久信為將領師衆赴向、而雖攻責未得陷、故應永廿六年己亥八月廿九日、存忠自將越薩摩山圍永利城、晝夜攻責者孔急也、雖然夫城堅固守兵不怠、而經數日之際、球麻・眞幸之援兵馳到、而陣山田之邊地、漸々逼我之陣、且復犬太郎殿催師旅發川邊、到山田邊欲為後攻、我兵對永利城門之外、向援兵日々使輕銳之士侵侮敵陣、偽引步卒以飛羽箭頃刻不止、于時松

本某戰死矣、城裏窮困之餘求和諧、念武以不止為患、以故解通路圍、忠朝下城退入隈城、於茲乎、存忠先入永利〔城〕、而後許清敷彈正忠矣、今度士卒群聚之次欲陷隈城、而感長陣之勞苦所以散軍也、彈正忠不忘今度厚恩、無異心抽軍忠、迄息男貴久代以不違也、

149 〔樺山氏文書〕

○ 證狀

右、此時節申談候一段之事、聊不可有吳篇之儀候、次〔本ノマ、〕於于後日塩貢身上之間之事、可被懸御意之由承候、是又同前候、

若此条偽申候者、

伊勢天照大神宮、殊者當國鎮守新田八幡大菩薩 諏方上下大明神 天滿大自在天神 熊野三所大權現御お可罷蒙候、

應永廿六年十月廿八日

〔相馬〕 山城守忠朝〔花押〕

〔孝宗〕 樺山殿

加治木殿

〔好資〕
柏原殿
〔知久〕
北郷殿

(本文書ハ「旧記雜録前編」二九八三号文書ト同一文書ナルベシ)

150 〔聖桑日記〕

○薩摩郡山田永利之城、総州山城守殿御座候処、澁谷蜂起して一陣を取、既合戦有而無手澁谷家切負、清色之手數十人被討、此に當屋形之御力を奉頼之由注進有、時老名ニ御談合候、前よりも守護方へ案内を被得候而、一陣をも被取候ハ、御合力有へくか、年来守護と云、如此法背、緩怠此事候哉、當座之合戦負被申事、都御承引難有と而事延候、依而清色彈正重而於以後無二心可御用ニ立と堅被申、此時ハ山城守方之一類退治之事も此面々之用ニ立候而こそ可輒候、総州におひてハ、末々迄も古敵當敵と可被存事、尤其理も有哉とて御出陣ニ定候、猶も老名敷旁ハ、氏久・元久御二代ハ彼面々就被申、山越候而御難儀ニ被極候しか如何と被申けれ共、是ハ内々佗事ニ候、纏而御出陣有而差寄、御取力〔永利城ヲ圍玉フ〕卷候得共、究竟之衆被籠候へハ日数送候處、相良・眞

幸兩手馳越、更無透陳を取、夜もなく小陣を責戦處、

此時御内之松本被討、〔南カ〕兩方よりも川野邊大太郎殿渡来

而後卷候、一勢城に差向、屋形後卷之敵ニ向合、城ニ

取合と見得候へ共更不被叶、日々ニ野卧合戦計なり、

敵も大勢ニ者不懸得、終ニ後より儀ニ成而城之事被開、

此方より受取、後日屋形ニ御座候而清色霜臺ニ御遣預

被申、涯分之御祝不及申候、適勢も為奇次、隈之城ニ

勢をも遣、南方之衆絡見度候得共、長々諸軍勢疲と云、

重而旁申談、退治と被仰、陣を開鹿兒島へ御帰候、左

有ニ依而、清色霜臺ハ一期之間、忠國迄替不被申候也

云々、

151 〔聖桑日記〕

○此上ハ川野邊・知覽大事なし、長門方は伊集院殿依為親類、内々老名ニ佗言候間、其旨屋形ニ披露候、御説ニハ長門事ハ多年南方之弓矢柱と成、度々對存忠緩怠を成、如此成行こそ存忠か幸此事候、彼方ノ於遺恨者可散と被仰出、時之儀ニ者上意尤去ル御事候得共、彈正御用ニ被立候ニ依り而、南方思召ことくニ成行候か

と存候、ケ様ニ侘言ニ任、長門守方阿多之事も道行、川野邊計ニ成、犬太郎殿よりも城之事ハ屋形法弟とて(次弟ノ)薩戸郡山門のこたく御越候、左様ニ成行候へハ、川野邊を受取、屋形御入部有而、躰而知覽上之木場之城ニ入御候而、山田鮫島方へ城明させ、上方御出候、上木場ニハ佐多方山田被差置云々、

152 一六二

○総州山城守殿隈之城ニ居住候、縦御座候共差事有間敷候得共、雜説も候時ハ六ヶ敷候と而退申候わんと而、寄々軍勢を以取巻候、其時迄も譜代之人々依被残居、城戸口ニ而太刀打候得共、無人数なれハ無指事、良有而山城守殿被仰候ハ腹を可切、城を進候而他國往還之事は家之可為難、又一身ニ成余所ニ居候而も雜説も可有候、可然ハ御近所之傍へ屋敷一所預り年と申、一日も心安有度と依被仰、其旨を伊集院(イヂイ)ニ屋形御座所ニ又三郎殿より御注進候、平田重宗御傍へ被居一々之披露、家を御嗜、酔て被仰事道ニ當、御痛敷通被申ニ依、山城守殿馬飼所と而、鹿兒島和泉崎ニ佐多殿近所へ御入、

遁世候而法名道聖与申、子息彦三郎殿同居住、夫よりして屋形も就折節御志し也、伊集院彈正も當家之一道を山城守殿細々御存知之事候程、嗜之事ハ常々被參候、聖榮若時者鹿兒島江參上仕、御奉公之隙ニ和泉崎ニ參り、山城守殿へ御意を受、御恩を蒙り、如此雜談ニ付候而も御物語之所を申候也、

153 一六三

○其後山門(ヤマ)判官殿御座候、動ハ和泉・渋谷より雜説有、其上犬太郎殿も六ヶ國境ニ被居、六ヶ敷事にて候、不可然候、山西ニ心置事候ハて、伊東ニ於取向ハ、存忠御事日州ニ可有御座と御儀定有而、山門ニ者又三郎殿貴久、後改忠國、為御太將諸軍勢を制陣を被取、庭尉御方とてハ高小野方計なれハ御志迄候哉、近所にて候へハ、天草邊ハ多年之好と而御音信被申候得ける由承候、屋形ハ山門落居之間、中途伊集院ニ御座候而、四ヶ所之高城方兄弟立分れニツ成、仍舎弟三郎方ハ屋形へ申入候得者、伊集院・市来・高江・宮里・羽島方、御内よりハ長門守高城ニ被打入候、兄之大川方ハ東郷・

國府・執印などを頼、水引ニ被居、其時ハ祇答院・入
来院ハ屋形を被申也云々、

154 〔聖業日記〕

○如此成行候得者、山門之事も判官殿肥州江御退散候而、
無程御逝去候、夫より相良方へ山門之事被遣候、其比
ノ老名式面之沙汰候しハ、忠久之御下始ニ者、先山門
ニ御座候、其後坂上に中郷堀之内ニ御座所定候けると
承候、貞久も御在國ニ者御下向候、信濃之本杜御諷方
を懷御申、彼在所ニ勸請御申、氏寺ニ鑑應寺于今有、
何之御兄弟様も是よりこそ誰とも本領ニ入部有事候、
當家之佳例目出度在所ニて候、山門程之所を國中ニも
被遣、又ハ判官殿之御座所落居候事共候物音、時々老
名數方ハ陰ニ而佗言候也、今程ハ彼在所薩广守殿御拜
領候、順事と申目出度候云々、

155 〔公記〕

○薩摩郡隈之城ニ者舎弟大田方被差置、高江・宮里及彈
正計たり、川野邊ハ久世之計ニ成、総州一家年比宗と

の人々蜂起ニ依而、伊集院計こそ漸知行候云々、

156 〔義天公御譜中〕

○上總山城守忠朝以隈之城畔、不足可畏、而動聞荒説之
不快于心、不如速以退治之、而應永廿八年辛丑八月廿
日、使貴久為將率軍衆到山北攻隈之城、忠朝之銳兵出
城門、盡筋力為防戰、雖然少勢不及再三、已倦一戰退
入城中、少焉忠朝曰、暫以雖支自殺之期何經數日乎、
所詮急速可自殺乎否、爰有一之訴、吾此間隔山嶽去覺
島者十有餘里、故自佗之疑更無止時、願有今度之自殺、
得一宅於覺島、絶浮世之事業、二六時中只事念佛、衰
老之身可俟末期之至而已、存忠催遲參之兵在伊集院、
貴久馳价使問件之旨、平田右馬助重宗聞之告我、我答
曰、速可應忠朝之請、於茲乎、忠朝僅訴之不空可也、
下城落飾名道世、移覺島和泉崎、佐多氏之近隣也、息
男彦三郎亦同居矣、畀小地、且隨時所以扶助也、

157 〔應永記〕

○同廿八年辛丑八月廿日、有御越山、隈城ヲ取卷セ給、

〔南林寺役人宮里某藏〕

○同廿九年壬寅、貴久大将ニテ山門ニ押寄給ヒテ被取巻、
 總州嫡子久世之御親父也、不可有打解夏、判官殿和泉・
 阿久寢（損カ之）ニ堅有御憑、可立御用之由、彼兩人被申臬ルヲ
 眞ノ事ト被思食、御心浅夏社口惜ケレ、終ニハ成獨ト
 玉ヒテ開城給、懸ル處ニ、亦伊作之城ニ馳込アリト云
 フ、左右至来、皆人目ヲ見合セ、更ニ物ヲ云人杜無リ
 ケレ、先年山北ト鹿兒島中違之御時ハ、伊作殿最前ニ
 奥州方ニ被参臬ル、總州之御夏第一ハ重縁親方ニテ御
 座、次ハ分國ノ御事也、亦惣領ニ而御座、如此義理不
 一方、去者總州之御ニ所御恨無喻方、久義驢テ被失玉
 フゾ怖ケレ、勝久ハ山門ニ在陣ノ留守也シカハ、二度
 不入伊作給、安鶴殿憑市来母義共ニ被落集、幽成有様
 ニ立栖而、十ヶ年計被明暮臬ル處ニ、國一揆ト云事出
 来テ、市来一人之成大綱云々、

雍州無幾程被開城、(行末在所社不審)
ヲホツカケケレ

〔伊作勝久譜中〕

○判官守久居住于山門院、動有欲起乱於國中之聞、且復
 大太郎殿沒落之後、在肥之前州高久而近其地、起兵革
 来亦未可知、云裕云恰、不嫌於我心、薩隅二州盡入手
 裏、而後欲向山東退治伊東①氏、然則先為山門発向之企
 應永廿九年壬寅、催軍衆以又三郎貴久為大将、撰良辰
 已發向、構陣營侵侮者甚急也、合力於守久者独有高尾
 野耳①也、天草其地相去不遠、且多年之好、雖然唯有問安
 否之道①通价使、無為隣好之発救兵、存忠山門落居之程在
 伊集院、爰山北之高城等兄弟忽為冰炭、兄大川某者與
 東郷・國府・執印等俱入守于水引城、弟三郎者屬守護
 以故伊集院・市来・高江・宮里・羽鳥及長門守・山田
 某等在①于高城之本城、而對水引城、其間相去不過數百
 步也、伊作大隅守勝久在山門之陣中、得此之時①處伯父遠
 江守十忠與一族家臣等偕謀、攻入城中已弒久義云々、

(本文書ハ一号文書ト同文ニツキ省略ス)

○^⑧幡摩守守久居住于山門院、而 太守之為冠者久矣、於茲使 又三郎貴久公^{後稱忠國}、為大將攻守久、于時勝久亦為從軍在山門陣中之日、^⑨伯父遠江守十忠与群臣俱為一揆、攻勝久之居城、且十忠企謀計、勝久之筭非、請于久豊公、久豊公亦有遺恨之未散、是以令許容有勝久追放之命、不得已而捨置妻子、向他邦令出奔畢、委曲記于 久豊公譜中者也、

○ 『今国分郷上小川村』
上小清水の山野境内の事

一 西ハはや人城の西のさかりひおとり山おさかう、「^一乾井」^一「^二開」^一「^三弟子丸」^二名^一今清水ノ内也、

一 北のさかいハはや人の城の北のさかりよりしてけなし野^一「^二界」^一「^三良」^一「^四隅」^一「^五芦谷尻」^一今清水ノ城をさかう、うしとらのすミハあしたにしりをさ水河原村ノ内也^一「^二登り迄」^一「^三追」^一「^四登り迄」^一「^五頼かう、梅力谷のほりまち、中のさこのほりまち、つふ^一「^二登り迄」^一「^三内」^一「^四松蓋」^一「^五修理^一ろ山のほりまちをうちとして、まつかさよりしやうり^一田^一「^二ヲ」^一「^三井手」^一「^四面」^一「^五赤岩」^一「^六界」^一「^七矢てんのさかう、いてのおもてのあかゆわおさかう、や^一嶽^一「^二今ハ世鳴道ト云」^一尾立^一「^二入^一たけをさかうてゑないさこのおたてをさかう、南ハく^一満崎^一「^二峯」^一まさきのミねにさかうて御まへのとり井をさかう也、^一右、此境目を御さため候し時ハ、雍州之御代ニ山野の

「^一陷」^一境ふミ事、守護方よりハ、田中たうけう・はま田かす計^一殿^一「^二厚地殿」^一「^三淵脇」^一へとの・あつちとの・上井ふちハきとの以上四人、雍州方より若松殿・伊地知殿・借屋入道・古河たうき・同大藏^一「^二中間」^一「^三将」^一御ちうけん右近せう・上小河おとなに^一田の^一「^二兵衛」^一「^三源藤」^一「^四檢校」^一「^五脇^一ひやうへ三郎・おちミのけんつう・江口才才・わきの^一「^二石工門」^一「^三名和」^一「^四兵衛」^一「^五團」^一その、數あもん・なハの太郎ひやうへ・その田道性、^一「^二此外」^一「^三乙名残」^一このほか上小河おとなのこらす見申候事実也、
正長二年つちのとの 十月廿五日 伊季（花押）

〔本文書ハ「旧記雜録前編」二一〇九四号文書ト同一文書ナルベシ〕

163 ○ 祝言千秋萬歳重々、抑今日廿九日、^一「^二隅州清水」^一姫木之城ニ罷登候間、石原口ニ勢を殘候處、敵方二手ニ懸候て大儀之合戦候、思程切勝候、始者河侯か居而候東之さす尾より金語石まで被切籠候、其後篠嶺之横入をもミあハせ候て、今城かんぬきの瀬戸、税所之両城之合まで切籠候、又敵方田ま向より^一「^二從山左工門尉久安太刀打ノ跡ニテ此名アルト金語石まで切付候、度々合戦候へ共也、語ハ吾ニ作り可ナルベシ^一御方者一人も無煩候、頸取候者ハ本田重經・河侯孫太郎其外切捨仕候中間數十人、夜ニ懸候之間、其外ハ頸をハ不見知候、御方太刀打ニ合候者ハ、弟ニて候出羽

〔御當家始書〕

〔有久〕「吾國元祖豊久コトカ」
 守、源左衛門・たふせ又七少ミ手負候、其外廻方本田
 守國親コトカ
 舎弟・長野備前其外一人もはつれ候とハ不見得候、手
 「欠」之事數十人候、可推量候、慶事、恐々謹言、
 〔文安五〕
 十二月廿九日 忠(忠國公)
 〔大始良殿〕 忠(花押)
 おあいらのと

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」一三三九号文書ト同一文書ナルベシ)

○總州之御先祖ハ師久ヨリ始テ御子上總介伊久、太夫判

官守久、其御子上総介久世、此御時於鹿兒嶋千手堂御

生涯(善カ)、十二月廿七日、御供之人々伊集院藏人進・本田

石見守・小田原彈正忠其外御内方數輩討死自害、奥州

ハ久豊之御時也、久世之御子犬太郎殿御没落在テ、肥

前高来ニ御逗留ケルカ、為何子細ニカ依ケン、三ヶ

國ニ御下向ケルニ、於眞幸院御生害候、是ハ忠國之

御時也、去社總州之御子孫悉御滅亡有テ、今者奥州方

御一人之御計ニ成候、今總州之御子孫トテハ、伊久之

二男山城守忠朝ト申、御子範藏主ト申御僧渡せ給イケ

ルカ、還俗在テ忠長ト申テ、四ヶ所邊ニ御逗留ケレ

トモ無指儀、既ニ邪答院之虎井之渡ニテ水ニ溺レ、又
 伊久之御舎弟三郎左衛門(附)久安ト申、是ハ白河合戦ニ
 討死、其子孫ニ三代兵部少輔殿ト申カ、今小二郎殿ト
 申テ如形之殘給ヘ共、中々有御座無甲斐、自身タニ由
 来ヲ無存知上ハ、他人ヨリハ何タル筋目トモ存知有マ
 シキニ依テ書付申了、

一從奥州氏久之御時、総州様ヨリ、忠久宇治川渡シノ御

時被召タル御鎧・小十文字之御太刀奥州様へ御渡シ有

キ、其故者(大)太夫判官殿守久者眼前之御嫡子ニテ御座共、

天性三ヶ國之守護者元久ニテ御座ヘシ、我御一期之後

者、此御重寶他▽◎家之△物ニ可成事御遠慮有テ奥州

ニ御渡シ候事、為御家之無御私御計トソ申傳クル、從

總州様之御使者者阿蘇谷殿・石塚大和守、自奥州様御

請之方者山田左京助殿・伊地知民部少輔、河邊兩城之

間於中途(二)被請取候早、惣而師久・氏久様御兄弟ニテ

御座ス上、殊ニ師久者御舎兄ニテ御座有間、兎角之次

第有マシケレ共、其器用天然氏久様勝リ給イケルトカ

ヤ、師久ヲハ執事師直ノ一字ヲ師久ト申、尊氏ノ御一

字御申氏久ト申ス、如此、去者大隅・日向ヲハ氏久為

守護、薩广守師久為守護云々、其比之合戦之状ニ兩嶋津殿ト在之、氏久之御時云々、

総州ノ御先祖ハ師久ヲ始トシテ、御子上総介伊久、其大夫判御子上総介久官守久、其御子上総介久世、此御時鹿兎於千手堂御生害、十二月廿七日、御供ノ人々ハ伊集院藏人進・小田原彈正忠、其外數輩打死自害ス、奥州ハ久豊ノ御時也、久世ノ御子ハ犬太郎殿没落有テ、肥前國高久ニ逗留有ケルガ、何タル子細ニヨリケルヤラン、三ヶ國ニ御下有ケルヲ、真幸院德滿於西城、十一月十一日ニ御生害、カタヒラニテ葬礼、本田石見守御供申シ、是ハ忠國ノ御時也、サテコソ総州ノ子孫悉滅亡有テ、今ハ奥州方ノ御計ニ成ヌレハ、今総州ノ御子孫トテハ、伊久ノ二男山城守忠朝ト申ス、其御子範藏主ト申テ伊集院廣濟寺住持ニテ渡セ給カ、長祿ノ世上渋谷ニカタラワレテ、還俗有テ忠長ト改名シテ、四ヶ所ノ邊ニ逗留有ケレトモ指儀ナク、結句邪答院虎井ノ渡ニテ水ニ溺レテウセ給フ、亦伊久ノ舎弟三郎左エ門尉久

安ト申、是ハ白川ノ合戦ニ打死ス、其子孫ニ三代兵部少輔殿ト申ス息ニ左エ門尉殿ト申テ如形残給フトモ、

中々ナキカ如也、自身サヘ由来ヲ無存知上ハ、他人ヨリハ何々ノ筋目ト存知有間敷ニ依テ、乍恐書付候畢ヌ、山城守忠朝ノ二男彦三郎殿ト申テ御座スカ、他國流浪有テ子孫ナシ、其妹マシ々候、比丘尼ニ成給テ伊集院圓通庵三代目ノ住持是也、

一元久御時ニ、上總介伊久ヨリ忠久宇治川渡ノ時召レタル御鑑・小十文字ノ御ハカセ、奥州へ御渡御申候ヌ、為御家無私計トソ申傳ケル、総州ヨリノ御使ハ阿蘇谷殿・石塚大和守、奥州ヨリハ山田左京亮殿・伊地知民部少輔河邊兩城ノ間於田中ニ是ヲ請取給フ、右、始書ト由来大同小異アリ、併せ見ルヘシ、元同人ノ著述ニ出ベシ、

166 曆應二年己卯南朝興國元年六月二十日、南方賊及相良氏・和泉

師太郎兵衛尉政保・牛屎・菱刈等與渋谷氏合軍、圍酒匂久景・延時法佛・河田慶喜等於碓山城、二十二日攻之甚急、城且陷、石原忠充・市来小太郎引軍來救、適有鳴鏑

出自新田宮入於賊陣、城中聞之、以為有神助奮戰甚疾、

賊兵敗走、碓山城遺墟在北郷作左衛門別館北十五町許、其地屬薩摩郡平佐郷天辰村、新田宮在碓山城西二十五町、

三年庚辰春正月二十四日、世子大夫判官宗久卒、(可脱力)

觀應二年辛卯南朝正平六年十一月二日、下文以 定山公為肥前

早湊村地頭職、賞勲功也、先是下野守忠氏為丹後田邊莊、

肥前早湊村地頭職、至是割早湊村以與 公、 足利義詮

薦 定山公為廷尉、十五日以書告之、

文和元年壬辰九月十八日、幕府賜 定山公 齡岳公教書

各一通、使誅直冬以下凶徒、冬十月三日、足利義詮與

定山公教書曰、得六月二十一日注進狀、擊大隅・薩摩凶

徒、籌策儘好、賜 齡岳公教書亦如之、

二年癸巳、市來太郎左衛門尉氏家・東郷藏人道義等凡十

五人皆應足利直冬、 定山公 齡岳公擊之、不克、三月

五日、二公上書乞師於幕府、十日、足利義詮賜執印友

雄書曰、島津判官注文具報功狀、儘好、宜更務立戰功、

秋七月九日、義詮賜 定山公 齡岳公教書各一通、使擊

薩摩凶徒、且言前日官軍不利、越在濃州垂井驛、曾未幾

日、勤王之師鬪至雲集、當以明日向京師、二十七日、義

詮賜 定山公 齡岳公教書各一通、去月十四日注進狀至、

具得功狀、儘好、此間凶徒逃遁、昨日寡人已還京師、其

俾國人聞知、益立戰功、冬十月二十六日、 齡岳公上稟

文答七月九日・二十七日之教書也、二十八日、 公上書

於奉行所曰、得七月九日教書、承中將殿還京、凶徒逃去、

此間凶徒聞之、望風而下、其未降者、遣二子及渋谷氏擊

之、合戰之事、尋當注進、十一月、 定山公移書、告薩

摩國地頭御家人曰、奉去月九日及二十七日教書、發兵討

凶徒、因論、今月十日內皆會碓山城、

三年甲午南朝正平九年夏四月十日、 定山公上注進狀於奉行所

曰、薩州凶徒蜂起、地頭御家人及渋谷氏奔命命不暇、宜

各賜教書以獎勵之、交名注文具錄別紙、此時宅萬城已陷、薩州凶徒會伊集院伊作

田城、將攻碓山城、開島山匠作等、將入日州真幸院、隅州下大隅、各還其邑、蓋欲與匠作合兵來寇、具見定山公注進狀云、五月二

十五日、和泉莊下司政保與名主知色彦三郎入道行覺據尾崎城、

合兵、將攻木牟禮城、 定山公引軍救之、六月十日、先

攻尾崎城、十二日拔之、二十日、 定山公 齡岳公上幕

府注進狀各一通、報討賊狀也、先是 公老倦于勤、使

定山領薩摩事、使 齡岳公領大隅事、於是 定山公居薩

广郡碓山城、 齡岳公居鹿兒郡東福寺城、文和元年九月二

日、一色道欽注、稱 齡岳公為大隅國守護人、二年三月五日 定山公注進狀白薩州凶徒事、 齡岳公注進狀白隅州凶徒事、據此、則 定山公領薩广、 齡岳

公領大隅、應是文和元年二年之際、而此年畠山直顯將攻東福寺、軍於野
本原羅、齡岳與之連戰數日、則此時、公既在鹿兒島明矣、故書之於戰、
山田聖榮自記、齡岳公為大隅守護戰、而居東福寺城者因定山之請也、
蓋、定山公居碓山城、而鹿兒島為薩州咽喉之地、守難其人、故使、齡岳
公居九月三日、幕府賜、定山公教書、褒美尾崎城之捷也、

十八日、定山公上書於奉行所曰、聞一色孫三郎殿方與
肥後凶徒須惠・多良木・菊池・内河等戰、先遣敵賦助之、
伏乞為白幕下、

四年乙未^{正平}夏四月、牛屎高元・市來氏家・東鄉道義與
和泉莊下司政保及肥後葦北黨通謀、二十六日夜、襲木牟
禮城、定山公自知識城來救、獲謀二人、賊徒引去、在

國司次郎道久應足利直^{全脱}與菊池肥後守及内河等賊徒通謀、
將攻知識城、聞直冬敗、其謀遂寢、六月朔日、定山公

代、公上稟文云、三月十二日教書到、使誅佐殿、謹聞命
矣、家翁有采薪之病、某代謝、又上國中凶徒蜂起注進狀、

足利直冬之入京師也、國中方有畠山直顯之難、定山公
戒嚴、是以不赴東寺之戰、二日、贈仁木殿書以謝之、十

八日、齡岳公上稟文、如、定山公辭、秋八月十八日、幕
府賜、定山公、齡岳公教書各一通云、國中凶徒蜂起、宜

與一色入道共圖之、足利義詮賜、二公教書各一通、亦如
幕府書、九月二日、市來氏家・鮫島蓮道・知覽忠世・左

當彦次郎入道從三條泰季攻櫛木野城、定山公自知色城

引兵來救、連戰五日、破走之、猿渡信重戰死、冬十月二
十二日、和泉莊名主等與牛屎高元・在國司道超共攻知色

城、定山公還兵救之、公及尾張守資忠被創、士卒被
創者百餘人、酒匂兵衛四郎・左衛門四郎・愛甲弥四郎・

土田五郎・阿曾谷三郎右工門尉・堀源五戰死、十一月五
日、定山公上注進狀、言櫛木野城・知色城有寇事也、十

二月二十八日、幕府賜、定山公教書、褒美知色之戰功也、
義詮賜、定山公及資忠教書、亦如之、

延文元年^二丁酉^{正平}正月、初幕府為、定山公請叙留於
朝、^{為延元年}十二月事、二十八日、宣旨、定山公叙從五位下、檢

非違使如故、
康安元年辛丑五月二十八日、定山公賜野太郎次郎宗
泰時吉名水田三町、^{八力}九月、探題斯波氏經與大友刑部大輔

氏^時將兵保豐高崎城、二十三日、氏經遣子松王丸、擊菊
池武光於筑前長者原、為所敗、二十六日、定山公帥衆

救之、路出肥後、和泉下司政保・牛屎高元・馬越藤四郎
行家及肥後葦北七浦黨拒之、公戰不利、軍多死傷、乃

反^{既力}叛復召募兵衆、將救探題、而地頭御家人莫有應者、會

168

中將様より、私儀九月十二日ニ向井市之丞殿御取次ヲ
 以小納戸役被仰付、寔以難有仕合ニ奉存候、且又同十
 二日ニ酒肴進上仕候、成程御機嫌御能被遊御座候、
 一 太守様 茂 碓山次右衛門殿ヲ頼得候て、北郷右衛門八殿
 へ御目錄進上仕度与御内意申上候得者、私義役儀祝候

「此間拾三三人」
 わた入御羽織一ツ 御わた入一ツ

碓山次右衛門殿
(久)

中神内蔵之丞殿

167 (光久)
 寛陽院様御形見として被下候品々

御ひとへ羽織壹ツ わた入御羽織一ツ
 御かたひら一ツ

和泉下司政保等蜂起、國中騒動、公遂引兵撃之、三年
 不克、
 貞治二年癸卯正平十夏四月十日、公傳薩摩守護職於
 定山公、傳大隅守護職於 齡岳公、秋七月三日 公薨、
 年九十五、葬鹿兒島五道院、

169

元禄九年子十月晦日於常盤谷

御能之覺

而進上仕候儀ニ御座候得者、弥以進上仕候間、御内意
 ニ而被仰出候間、同廿一日、北郷右衛門八殿ヲ以進上
 仕候、以上、
 九月 池田仲左衛門

一 綱貴様去年亥十二月、於江戸被遊御任官たる御祝之思
 召之由ニ而、上下老躰之衆、且又 寛陽院様御心安ク
 被召仕候衆、御能拜借見被仰付候事、
 一 晦日六ツ時分參上可仕旨、前以鎌田(政方)後藤兵衛殿御取次
 ニ而被仰渡候、拙者儀ハ御請之御礼申上候、當病差合
 之衆者御断之由候、
 一 晦日之朝七ツ時分、私宅を罷出、山田政圓老同道申、
 夜内ニ參上、有川市兵衛殿所へ定宿仕、六ツ過御假屋
 へ參上申候、
 一 拜見之衆何れも被相集候而、御菓子銘々被下、御酒壹
 通被下候、吉田六郎右衛門殿を以、何れも老躰之者共
 ニ而候条、心次第可被下之由被仰渡候、

一六ツ過 御出座候而、御能早速相初り、五番相濟候而
中人有之候、

一中入之間、拜見之衆へ二汁三菜之御料理被下候、吸物
巻ッ・御酒二通喜入安房殿^(入悉)を以随分可被下之旨被仰渡
候、御料理已後御菓子銘々ニ被下、御茶迄被下候事、

一御前御相伴之衆者、嶋津萬山老・町田勘解由殿・伊集
院十右衛門殿ニ而御座候、御膳相濟、右三人之退出ニ
而、拜見之衆御通り被仰付 御前へ罷出頂戴仕候、但

御押へ喜入安房殿、御酌小姓衆ニ而御座候、御通り之
一番川上將監殿・山田政圓老、其外何れも次第不同ニ
罷出候、拙者などハ七八番かと覚申候、

一御通り相濟御目通り、御簾上り申候而、御能初五番有
之、且又御望之乱猩々御能市左衛門被相勤、以上拾壹
番ニ而御座候、狂言七番、御能番付左ニ相記申候、尤
拜見之衆もあらく、覚為申衆記置申候、

一拜見之衆よりひ重二組・樽進上申候、客屋ニ而相調後
日ニ入目、上方之衆ハ町田勘解由殿所へ持せ申候、
子)

十月晦日 児玉四郎右衛門

嶋津萬山老 伊集院十右衛門殿 町田勘解由殿

川上将監殿 山田政圓老 大山主馬殿
渋谷嘉納右衛門殿 名越主水殿 弟子丸市之介殿
喜入休右衛門殿 財部傳右衛門殿 碓山次右衛門殿
向井市之允殿 芦谷藏之丞殿 若松宗休老
平山玄忠老 渋谷喜兵衛殿 四元甚七殿
清水弥兵衛殿 別府式部左衛門殿 志和屋左京殿
山下喜右衛門殿 中馬紹宅老 此外覚不申候、
御能組

難波中西長兵衛 奥山五兵衛 嶋津頼母殿
經政有川五郎 折田仁右衛門 根占兵十郎
野之宮中西長兵衛 原田孝兵衛 宮原嘉右衛門
夕顔伊集院將監殿 肝付満右衛門 税所七右衛門
鐘旭中西 若覚兵衛 上村七兵衛 宮原嘉右衛門
龍田宮之原神五太夫 原田孝兵衛 山元覚右衛門
柏崎伊集院為右衛門 上原喜之助 税所七右衛門
熊坂中西長兵衛 伊藤覚兵衛 三嶋五太夫 宮原嘉右衛門
しうき佐多全殿 奥山五兵衛 折田仁右衛門 三嶋傳右衛門
しれは喜入休兵衛 岩城作太夫 原田孝兵衛 國分元右衛門
乱猩々中西市左衛門 肝付満右衛門 奥山五兵衛 川野孫七郎
原田孝兵衛 上原喜之助 佐多豊前殿 根占兵十郎

十月晦日

児玉四郎右衛門

芦谷内藏之丞

中馬紹宅

右者、来ル晦日、於常盤谷御能被仰付候ニ付、見物可罷出之旨被仰出候、御料理をも可被下由被 仰出候条、朝六ツ時分常盤谷ニ参上可被仕候、今明日中御請御禮可被申出旨、安房殿御差圖ニ而候、以上、

但朝之拵私宅より仕可被罷出候、晚御料理被下候、且

又各支度之儀ふくさ物・麻上下着可有之候、法鉢之人

者十徳可有之候事、

(元禄九年)
子十月廿四日

鎌田(政方)後藤兵衛

(十五年正月六日)
寛永十四年丁丑霜月

嶋原御加勢軍衆賦

一 與軍太将

乘馬
豊後守

同 山田民部少輔

同 洪谷石見守

同 洪谷四郎左衛門

川上源三郎

堀弥四郎

児玉四郎兵衛

柏原西市丞(之脱力)

大嶋久左衛門

福屋助左衛門

始良三郎兵衛

田上覚左衛門

(四本六左衛門尉脱力)

福崎新兵衛

土持平左衛門

田原主膳正

村尾源左衛門

佐藤仲兵衛

長谷場少右衛門

始良萬兵衛

深栖内膳正

書置

一本高四百五斛者

右者我等へ可被下之由、筑州老(宛玉利旨)被仰候事、但萬兵衛始

良殿へ罷居候刻也、右之高之内四拾八石者隠居分とし

て母儀方へ渡置候也、但春山中假屋之屋敷也、

一 筑州存命之時、拙者へ被下候高三百五拾斛ニ而候、但

両度へ被下候事、

一 筑州老存生之時、彼萬兵衛始良之養子不屈候ニ付而、

藥袋なしニ而候へ共、少次第ニハ高を分可遣之由被仰

聞候事、少右衛門萬兵衛被聞候、如何様ニも拙分別次
第二可仕候間、御氣遣入間敷由返事申候事、

一今度上洛申ニ付而、母よりも庶子分之儀を被申候、拙
子同意候間、隱居分之内高三拾石、庶子分と而萬兵衛
へ相渡可申之由申候、使山口五郎兵衛殿・児玉主水助
ニ而候、然共兼而返事無之候事、

一高廿石者、母儀勘忍分と而相渡可申之由申候、但出物
等此方より可申候由、右之衆ニ而申候事、

右之條と、拙子罷登ニ付而申渡候得共、如何様ニ共不
通ニ返事無之候事、高百斛ほとも指分候ハ、可然様ニ
被存候由候間、爰許ニ而法ニも無之改、^(意)落着も不申候
而罷登候、已來世間之物沙汰如何敷候得共、萬兵衛氣
任ニ而候間、公義をも被申候ハ、其時節之御沙汰次
第と存候事、

三月二日

同四郎兵衛（花押）

児玉新四郎殿

まいる

慶長八年癸卯三月十四日ニ鹿兒嶋後迫ニ而誕生申候、

猪俣為右衛門則康

寛永七年
一廿八ノ八月より御船手奉行所へ相詰候、奉行國分十右

衛門殿・堀和泉守殿、相役始良三郎兵衛殿・赤崎吉右
衛門殿也、

同十二年
一卅二正月十八日より ^(家)黄門様致御供江戸へ進物蔵仕候

而參候、相役大窪備前守殿、付衆御小者衆鮫嶋松右衛
門・同慶右衛門・池上織部佑・二木林右衛門・有馬休
右衛門・野元満右衛門也、左候而、大窪備前守殿煩ニ
付、蔵役御免ニ付相易候、明ル六月罷下候、乘馬にて
進物蔵如何候得共、人無之由候而被仰付候間相勤候、
相役野元權右衛門殿江戸にて仕候、下向ニ者始良三郎
兵衛殿也、

慶長十八年

高拾七石三斗七升式合

始良新次郎殿

元和六年

高三石

始良新次郎殿

寛永九年

高百貳拾七石

始良三郎兵衛殿

萬治二年

貳百貳拾壹石六斗

始良十郎兵衛殿

173 (本記事ハ一六五号ト同文ニツキ省略ス)

174 「慶長十八年十二月朔日」

鹿兒嶋陸小姓衆

始良新二郎

(本文書ハ「旧記雜録後編四」一〇七三号文書ノ抄ナルベシ)

175 久安

定山公次子、而 久哲公弟也、貞治年間、 定山公
傳久安以薩摩河辺郡・豊前副田村・信濃大蔵郷・肥
前松浦庄内早湊村等、而居于碓山城、因以碓山氏、

二 忠安

三郎兵衛尉 号始良、

三 光久

三郎左エ門尉

四 治久

兵部少輔

五 祐久

兵部少輔 復号碓山、

六 久廉

左衛門尉

七 久次

又九郎

八 忠親

彌九郎 又号始良、

戦死於隅州生別府、

九 久近

次郎左エ門尉

十 久次

新次郎

戰死于三之山、

十一
忠種

三郎兵衛 為久次後、實木脇(場力)新次郎男也、

女子

鎌田源助政武妻

久□

萬兵衛

○由忠種無男可嗣、乞為嗣子冒始良氏、實兒玉筑後

守利昌三男、母根占宗左工門女○寬永十四年丁丑

十一月、家久公豫撰兵衆、將遣以擊妖賊於肥前

島(原脱力)時萬兵衛及父忠種屬島津久賀隊下、○十六年

己卯、去回於兒玉氏、二十一年甲申十一月九日卒、

初久寬 久包 幼字乙千代 十郎兵衛

十二
久忠
久包

次右工門尉 後改十郎兵衛 老號道鉄、

為忠種後、實喜入久右衛門久守男、母仁禮藏人頼

尊女 以寬永九壬申二月十七日生也、

○轉任御納戸奉行・御近習役、領地頭職、

○寛文二年壬寅九月朔日、網久公登江城、忽疾于

營、久包趨而看病、暫得快氣扈從回邸、晚召之前

手自觴之賜方金百片、以賞其忠、久包亦獻宝刀賀

之、○十一年四月復碓山氏、命也、

娶本田吉右工門親直女為妻、

久□

八郎右衛門

為御船奉行、

久□

次右工門

御馬廻

久□

次右工門

實石原十兵衛嫡子也、